
鈴木三兄妹、異世界へ行くっ！！

宮古奈都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈴木三兄妹、異世界へ行くっ！！

【Nコード】

N0994X

【作者名】

宮古奈都

【あらすじ】

ある日突然、エレベーターから、異世界へトリップしてしまった鈴木三兄妹たち。

お兄ちゃんへたれな男子校生勇者

お姉ちゃんは将来有望なBLマンガ作家にして女子高校生の聖女だけど、末っ子は児童で異世界の言葉も言語も解らないが順応性が高い。

そんな鈴木三兄妹の召喚された目的とはただの魔族退治ではなかった……

召喚

アディストリア公国は20年前、魔族狩りを始めた。

先の国王、アレキサンダー・アディストリア王が魔王の首を打ちとり、国に持ち帰った。

国の大聖堂に国の繁栄と力の象徴として静かに安置されていた。

だが、魔王の七人の子が残っており、いまだ魔族狩りは終わったかに見えていたが、水面下では魔族狩りはいまだ続いていた。

朝、いつもの時間に自宅マンションの8階に住んでる鈴木三兄妹は学校へ行くためにエレベーターに乗る。

ちりんっ……

1階に降りてエレベーターが開き見えた景色はいつもと違うものだった……

ようこそ

《ようこそ、いらっしやいました。

勇者様、聖女様、この世界をお救い下さる救世主様方、このときを
お待ち申しておりました。》

と、金の煌めく長い髪に透けるような白い肌。綺麗な濃い青い瞳を
もつ。フランス人形のような美少女がこちらを見て、話していた。

鈴木三兄妹は本能で悟った。

見なかったことにしよう！

聞かなかったことにしよう！

何もなかったことにしよう！

関わらないほうが賢明だ。

そう思い、エレベーターの閉じるボタンを押す。

が……閉まらない。

《残念ですが、使命を果たすまでは帰れませんですわ。》

先ほどのフランス人形似の美少女は言う。

そう召喚されてしまったのだ。

お約束の展開だ。

もう後戻りは出来ない……。

目的（前書き）

《》は異世界語で「」は日本語だと思ってください。

目的

鈴木三兄妹たちは、仕方なくエレベーターから降りた。

後ろを振り返ると鏡の中から出てきたらしい。

《はじめまして、私はあなた方をお呼びした。エヴァンナ・アディストリアと申します。

ここはあなた方とは異なる世界であり、今ここにいらっしゃる国はアディストリア公国の大聖堂でございます。》

フランス人形似の美少女は言う。

辺りを見渡すと、キリスト教の教会に似ている。

上を見上げると星々と月が煌めくステンドグラスが光輝いていた。

エレベーターの中ではフランス人形似の美少女のエヴァンナしか見えなかったが、他にも三人の男性と鎧をきた二人がいた。

男性の内に二人はよくエヴァンナに似ている青年の方は20歳くらいで背は高く。体型もしっかりしている。

服装は中世の西洋貴族が着ている感じのに似ている。

もう一人は、少年と言っても近い感じだ。

背は低くもないが高くもない。まだまだ伸びる感じだ。体型は細身である。中性的な雰囲気で服装も西洋貴族的にだか、半ズボンなのが少年らしさを出している。

最後の一人は真っ赤に燃える赤毛に緑の瞳でちょっとつり目の顔の整った青年だ。

体型は背は高く細身だ。服装も青を基調とした知性的な雰囲気です洋貴族的だ。

エヴァンナはそれとは違い、白いシンプルなドレスだが、神秘的でどこか巫女さんを思わせる服装に首には色とりどりの数珠に真ん中に鏡がついていたペンダントをしていた。

エヴァンナは話を続ける。

《あなた方を召喚した理由は、この世界に残された魔王の七人の子を保護して頂きたいのです。》

《なんで、魔王の子供達を保護しなけりゃあいけないんだ。普通は退治するもんだろ！》

鈴木三兄妹、長男発言。

だか……

「ねえ、お兄ちゃん。さっきからあのお姉ちゃんなんて話してるの？」

その前に、大問題発生！

鈴木三兄妹の末っ子は今までのエヴァンナという言葉は通じていなかったのだ……

この先、どうなることやら……。

理由

《そちらのお小さい方はこちらの言葉がお分かりにならないのですか？》

エヴァンナが尋ねる。

鈴木三兄妹、末っ子は首を縦に頷く。

言葉は分からなくともなんとなく周りの雰囲気を読める。

《それでしたら、私がこちらの言葉をお教え致しますが？》

末っ子、笑顔で頷く。

何だかすでにコミュニケーションがとれている。

末っ子の国語教師は決まった。

ひとまず、問題解決した。

《では、肝心な魔族保護のほうは余が話をしよう。》

金髪の一番背の高い青年が言った。

ここから、鈴木三兄妹が召喚された理由が説明された。

その1 ここ120年ほどアディストリア公国周辺は近隣諸国で争いがなかった。

その2 先代の国王は魔王を倒し、魔族狩りをする者が増えしまったこと。

その3 魔族とは交流がなく、本来むやみやたらに人間を襲うことがなく、静かに暮らしていたこと。

その4 先代のお陰で魔族達が激減し、このままだと絶滅危機があること。

その5 調べによると魔王には概ね7人の子供達がいることが解り、王族の者は警戒され襲われる可能性が高い為、それを第三者の手で探し出し、保護してもらうこと。

その6 魔族に対する偏見なくすために鈴木三兄妹を召喚したのである。

以上が鈴木三兄妹が召喚された理由であった。

先代の国王は半年前に亡くなり、現在説明した青年がアディストリア公国現国王アラジン・アディストリアであった。

属性（前書き）

これからの会話は「」で行います。

属性

「それでは、属性を詮索させて頂きできます。先に私が行いますのでご覧下さい。」

エヴァンナは用意されてある丸い水晶玉に手を置いた。

水晶から文字が浮かび上がってきた。

《名前・エヴァンナ・アディストリア

年齢 14

性別

出身 アディストリア公国 城の中で生まれる。

職業 アディストリア公国第一王女
月の精霊に愛されし巫女姫

レベル 12

HP 34 MP 68

技 召喚

祈り》

次に兄が手を置いた。

《名前・シズヤ・スズキ

年齢 17

性別

出身異世界地球の日本

職業 学生 高校3年

へたれな勇者

レベル 1 ……情けない

HP 10 MP 2

技 なし》

その場において文字が読める者皆が心の中で思った。

「へたれな勇者、大丈夫なのかつ！…しかも情けないと辛口だった。」

次に静華が水晶に手を置いた。

《名前・シズカ・スズキ

ペンネーム ジュリエット・シャーロック

年齢 16

性別

出身 異世界の地球日本

職業 学生 高校2年

アマチュアのBL マンガ作家将来有望
聖女

レベル5

HP 18 MP 8

技 72時間不眠不休で創作活動ができる。》

その場にいた文字が読める者皆が心の中で思った。

「「なんか凄い！BLとはなんだ。勇者より強いのは何故なんだ。」

」

最後に末っ子の雫が水晶に手を置いた。

《名前 シズク・スズキ

年齢 10

性別

出身 異世界の地球 日本

職業 児童 小学5年

レベル 10

HP 30 MP 22

技 正面打ち一教表

突き小手返し

横面打ち四方投げ》

その場にいる文字が読める者皆が心の中で思った。

「知らない技だ何なんだろう」「

未っ子の雫は文字が読めない。

上の兄と姉は知ってる雫は合気道を習ってることを。

二人は互いに同じことを思った。

（我が妹よ！強く育ったなあ。）

勇者の剣と聖女の羽根

「こちらは、我が国に伝わる勇者の剣です。

鞘から剣を引き抜くことは勇者様しか出来ません。

シズヤ様、どうぞこの剣を鞘から引き抜いて下さいませ。」

エヴァンナから静也へと剣が渡され、引き抜く。

かちやつ……。

鞘から剣が引き抜けた。

が、刀は竹光だ……

本当に情けない……。

これには皆、妙に納得した。

（へたれな勇者は伊達じゃない。）

静也が剣を鞘に戻す。

居たたまらない感が流れる…。

「流石ですわ。勇者の剣を兄上達が抜くことが出来なかったのですから、剣の刃は勇者様のレベルに応じて変化すると歴史の書で言い伝えられていますので、これからでございますわ。」

エヴァンナの助け船がでる。

「そして、聖女様であらせますシズカ様にはこちらの白い羽根とインクがございます。これらは聖女の羽根と魔法のインクと呼ばれております。」

エヴァンナから静華の手に聖女の羽根がてわたされた。

すると、白い羽根は羽根ペンへと変化した。（静華愛用のマンガを

書く時に使うペンだ…)

静華はにっこり笑顔で言う。

「ありがとうございます。月の巫女姫様、大事に使わせて頂きます。

」

兄と末っ子は同時に心から思った。

((あの人は必ずやる。絶対布教する。))

末っ子は何を思ったか兄に同情の目を差し向けて、ぽんっと肩に手を置いた。

(あたしはお兄ちゃんの味方だよ。)

と末っ子の雫は日本語で言った……。

雫はすでに姉の黒いオーラを察知して、兄を心から心配していた。

この世に生をうけて妹歴10年、この勘は今のところ外れたことがない末っ子の雫であった……。

男子禁制桃色話（前書き）

零視点です。

ボーイズ・ラブ苦手な方は飛ばし下さい。

男子禁制桃色話

鈴木 雫（10）小学5年生　うちのお姉ちゃんはで美人で運動神経抜群、成績優秀な自慢ですが……

日本の一般世間で言う『婦×腐〇女子』で

近所でも残念な美少女で有名です……………。

そもそもあたしが物心ついた時には既にお姉ちゃんはめくるめく世界の住人になっていました。
今のあたしより一つ下くらいの年からコミケでイラストやら4コマを書き売り出していました。

そしていま、まさにお姉ちゃんの新境地へとやってきました。

あたしはなんとなく雰囲気を読めました。

お姉ちゃんがあたしを呼んでいます。

ランドセルから一冊の薄いマンガをとりだしてお姉ちゃんにわたししました。

「ところでシズカ様、その羽根ペンで何をお書きになるのですか？」
スゴくキラキラした金の髪に白い肌の濃い青い瞳を持つとてもきれいなお姉さんが何か言います。

「ボーイズ・ラブBLマンガです。」

お姉ちゃんが何かに言ったのかあたしにもはっきり意味が分かりました…。

「はしりやうぼうまんが坊主等部漫画？
とは何でしょうか？」

キラキラのお姉さんの微妙に惜しい発音が聞こえます。

「ボーイズ・ラブとは即ち美少年同士の恋愛を主題とし、性的行為を感性的繊細に描いた絵画です。」

どどーんつと一気に

周りの美形のお兄さん方3名が引いてます。
鎧兜さん2名は辛うじてよろめきました。

お兄さんは慣れているので言ってしまった。と顔にでてます。

でも周りの方のドン引きようはいつもより凄まじいのは何故なんでしょう？

あとで、お兄ちゃんに聞いて納得しました……。

お姉ちゃんが聖女様でその聖女の羽根であれを書く……。

周囲のお兄さん方があんなにドン引きしたの分かりました。

ちなみに、あたしがお姉ちゃんに渡した薄い本のタイトルは、

『忍 ま 乱 郎 少年たちの忍び恋』
作者 ジュリエット・シャーロック

内容は小学生向けのほつぺたちゅーの描写までの初心者入門編だけど、衆道しゅどうについての古い歴史があり、あとでこのマンガを読んだエヴァ先生が衆道しゅどうの授業や忍者の異世界へ歴史的価値があるとかで、

キラキラのお姉さんことエヴァ先生が目を輝かせていました…。

後に、聖女ことお姉ちゃんはジュリエット・シャーロックの名で覆面BLMマンガ作家として一部の腐女子乙女たちの教祖となり、布教こと腐教活動は成功して魔族保護の一躍を遂げるのですが…

それは、しばらく先のことでこの時は誰にも予測出来ませんでした。

ちなみにこの時、あたしはお姉ちゃんが聖女じゃなくて魔女として召喚されたと思っていました。てへ。

先王の遺産

「最後に僕から父上の遺産を見せてやろう！」

金髪碧眼の美少年ことジャクソン王子だ。

とうとう、いや、やっとセリフが言えた。

ジャクソン王子の声はまだ少し高めだ！

大ヒットだ！

お姉ちゃんが鼻血放出しだした…。

説明しよう！

姉の静香は、好みの美少年や美青年を見ると脳内妄想がヒートアップし激しく萌え尽きてしまい処理しきれなくなってしまう。そこで鼻血を放出してしまうのである。

セーラー服の美少女に鼻血とは考えがえたくない組み合わせ…。

静香のことは、この際放って置こつ。

ジャクソン王子は大聖堂の地下へ3人を案内する。

「これが亡き父上の遺産！魔王の首だ！」

それと同時に白い布を引いた。

魔王の首だ……。

一言でいって、
ドラゴン
龍の首だ。

怖くない、むしろ恰好いい。

腐れないように、防腐の魔法をかけているとかでリアルで迫力がある。

突然、何を思ったのか末っ子の雫が動き出し、がばっあと龍の口を開き頭を突っ込む。

周りが啞然としたのも無理はない。

かつて、死んでいるとはいえ魔王と言われたものに口に頭を突っ込む者は今までいなかったのだから……。

兄と姉と末っ子といいこの者達で本当に大丈夫なのだろうか…。

アデイストリア公国の魔族保護計画は前途多難だと、誰もが思った。

ー	ソ	ナ	タ		ワ	レ		ノ		コ	エ		ガ
タ	ノ	ム				ワ	レ		サイ	ゴ		ノ	コ
ナ	ヲ				ツ	タ	エ	ー					

ノアル。と、

その微かな声が聴こえたものはその場に、

一人だけいた。

先王の遺産（後書き）

やっとプロローグ的な話が終わりました。

兄は聖女（女装）を演じる 前編（前書き）

兄、静也視点です。

兄は聖女（女装）を演じる 前編

エレベーターから異世界へきて、3日目の昼間の出来事だった。

ことの始まりは、静華の一言から始まった。

静華は今夜、開かれる舞踏会にアディストリア公国の騎士団長にエスコートされていく予定だったのだが……

「私、出ない。それよりお兄ちゃん代わりにでて」
「嫌だ」

俺は何だか身の危険を感じて一歩後ずさる。

「私、いつ誰かに命狙われて、襲われるか判んないし、お兄ちゃん私に代わってがんばってくれるよね？」

静華にそこまで言われるといかん。流されてはいかん。

俺は負けない。ここで頷いたら俺の男としての尊厳が無くなる。

「静華その為にこの国一番の騎士団長がエスコートしてくれるんだぞ。」

俺は祈る想い、いや神にすがる想いだ！

神様、仏様、霊様

この憐れな勇者、静也を助けたえ、いや助けて下さい。

ヘルプ・ミーッ！

「だからじゃ、ないの騎士団長でしょ？

もう、萌えまくちゃって本番で鼻血放出しちゃいそうで怖いのよ。それに、お兄ちゃんには初めから拒否することは出来ませんので。」

静華はゆっくりと俺に近付き…

俺の意識は強制終了させられた。

ふと、気が付けば静華に似た女性がいた。

いや、違う。

これは、俺だよ。

またしても、俺は負けたのだな。

これで何度目だろうか……

中学高校とあいつ（静華）のせいで、女装癖だのオカマだなんだと噂がたったり、俺を題材にしてBLマンガ書くし、恐ろしくて読めない。

「綺麗になつたでしょう。これなら簡単にバレないでしょう。」

静華はにっこり笑って俺を見た。

「見た目、だけならな声はどうするんだ。」

「喋らなくていいよ。雫みたいに、言葉解らない設定でつて、月の巫女姫様に伝えてあるから、お兄ちゃんは扇子で顔隠して適当に相づち打って置けばいいから。」

「勇者としての俺の出席は？」

「今日は出番なし。お腹こわして休みます。」

最悪だ異世界でも妹に敵わないなんて…

まあ、ゲリしました休みますじゃあなかっただけましかな……

こん、こんっ、

ドアを叩く音がする。

これは、俺にとって戦いのゴングになる音だった。

兄は聖女（女装）を演じる 後編（前書き）

聖女に成りきろうとするが、ときどき静也視点に戻ります。
P V 1000 越えました。ありがとうございます。

兄は聖女（女装）を演じる 後編

ドアの開けると向こうにはアディストリア公国 第一騎士団所属の騎士団長が待っていた。

明るい茶髪に春の暖かい空の瞳を持ち優しくそうな顔立ちの良く聞く甘いマスクの二十代半ば位の紺色のタキシードを着た優男が立っていた。

名前は確か… 忘れた……。

騎士団長でいいや、異世界語解らない設定だったし、聖女を演じてよう。

「あなたが聖女殿ですね？」

騎士団長は言う。

その声は低く美声だ。

普通の女の子だったら腰にきてゾクゾクするだろうと思う声の持ち主だ。

背も高い、聖女よりも目線が上だ。

聖女はピンクのドレスを着ていた。露出が少なく。
清楚で美しかった。

ただし化粧濃いのが残念だが、黒い髪に瞳はこの国では珍しく、
綺麗で魅力的だ。

騎士団長は膝まずいて聖女の手を握る。

「私はアディストリア公国第一騎士団所属の団長を勤めております。
ランスロット・ハーバードと申します。
今宵は私を御相手に楽しみ下さい。」

そうして、騎士団長は聖女の手の掌に唇を滑らした。

聖女は握らなれてない手がぎりつと握りしめ手が白くなっていた。

舞踏会ではうっとおしい視線がいくつもの注がれていた。

そこへ、

「今晚は、ランスロット様、シズ力様」

エヴァンナ王女ともう一人焦げ茶のお下げにぐるぐる牛乳瓶底眼鏡の灰色のドレスを着た地味で小さな女の子が一緒にいた。

「おや、その子はだれですか？」

騎士団長が問う。

「ええ、この子は私の教え子でシズクと申しますの。」

そう答えると、小さな女の子は舌つたらずな言葉で、

「おどる…おたましゅん」

雫は早くも異世界の単語を覚えつつあるようだ。

しかし、おたましゅんとはだれ？

雫は聖女の手を引いた。

どうやら、お姉ちゃんと言いたかったらしい。

雫は聖女を伴ってダンスホールへと向かった。

少女との踊る時間は正直心からほっとする。

（お兄ちゃんが初めて踊る相手で良かったよ
そうだ、念のためパーティー組もう）

少女は日本語で言う。

ああ、お兄ちゃん冥利に尽きる言葉だ。

しかしパーティーとは？

もう一緒に踊っているし…

（まあ、いいだろう）

と小声で零に言う。

ああ、いかん聖女の仮面が外れてしまう。

聖女と少女は騎士団長と王女の元へ戻る。

二人はお酒を飲んで話していた。

聖女は日本では未成年者なので飲めない。

騎士団長は聖女を踊ろうと誘う前に小さな少女が着かさず騎士団長をぐいぐい引っ張って行った。

騎士団長は中腰で踊り難そうで少女の方も足を数回踏んでいた。

聖女はその間、エヴァンナ王女と踊っていた。

結局、騎士団長とは踊る事なくやっと舞踏会も終わった。

王女たちと別れて、聖女の私室へまでついてきた…騎士団長。

「あなたともう少しお話したいのですが、中に入っても宜しいでしょうか？」

聖女は言葉が解らない素振りですりあえず聖女の私室へと入れてしまった。

流石に疲れたようで聖女はソファへ座る。

何だかさつきと様子が変わっている。

聖女を見る瞳に艶かしい色をはらんで、じつくりと全身を見ている。

「聖女殿、申し訳ない……」

騎士団長がゆっくり歩み寄る。

何だか怪しい雲行きだ。

聖女が座ってるソファに騎士団長が隣に座る。

「…聖女殿……」

騎士団長は聖女の耳に唇を寄せて呟く。

その熱を帯びた声は色っぽく。耳にかかる吐息に聖女はぞくりと身体が反応する。

騎士団長は聖女を優しく抱きしめ、左手で頭を撫で、右手は聖女の腰をしっかりと引き寄せ、ゆっくりとソファへと押し倒していく。

ぎしりとソファが軋む。

聖女はしっかりと騎士団長に組しかれている。

聖女は両手で騎士団長を必死で押し戻そうするが両手は聖女を引き寄せていた手によって拘束される。

聖女は騎士団長の下半身の熱く固くなったそれが自分の太ももに押し当てられているのに気付く。

「ひっ」

と恐怖を感じて聖女が声を出す、騎士団長の顔はすぐ聖女の目の前にある。

騎士団長は聖女の紅い唇に自分の唇を重ねようと目を瞑り

がしゃんっ！！

その音を立てたのは焦げ茶色のお下げの髪にぐるぐる眼鏡をかけ、灰色のドレスを着た幼い少女だった。

幼い少女はワインボトルを握り絞めてボトルの中央からその半分が割れている。

騎士団長の頭を殴ったのだ…。

さらに少女はガラスの窓を回し蹴りで蹴り壊して、凶器のワインボトルをその辺に投げ捨てた。

その少女は聖女を気を失った騎士団長から引き離すと、

「きゃあああああ————」

と、大きな悲鳴を上げた。

その声を聞いた見張りの兵士が数人やってきた。

「せいしょ、ゆかい。きし、かばう。」

たどたどしい、発音で状況を説明する。

要約すると聖女が誘拐されそうになり、騎士団長が庇って襲われたところという感じだ。

状況からしてもその時の聖女の様子は酷く青ざめていて、騎士団長もソファの上でうつ伏せで後頭部にタンコブをつくり、ガラスの破片で怪我をし、おでこから血が流れていたので、ほぼ間違い。

ただ不思議なのが何故凶器がワインボトルだったのかである……。

しばらくして人が居なくなり、幼い少女と聖女の二人きりになった。

すると、

（お姉ちゃん、エヴァ先生、出てきても大丈夫だよ。）

幼い少女が日本語で言った。

くると部屋の一部の壁が回転して二人の少女が現れた。

（お姉ちゃん、騎士団長さんに一体何飲ませたの？）

（お城にあった図書館の本でむらむらの薬をつくってみたの効果抜群だったみたい。

良いもの見れちゃった目の保養。いひひっ）

「壁が回転するよう魔法でつくってみたのですが…カラクリとは面白いですね。」

末っ子、本物の聖女いや魔女だ！
そしてこの国の王女が順に喋る。

（おい静華っ！、俺の貞操はどうなる）

聖女いや静也が言う。

（そんなの減るもんじゃないし、いいじゃない）

（お姉ちゃん、今回は行き過ぎだよ。お兄ちゃんの尻の穴はへらなくても良くないよ）

末っ子よ、君はどこまで知っているんだ……

怖くて聞けない。お兄ちゃんであつた。

ともあれ、舞踏会での騒動で事実上この国の騎士団長をノックアウトしてしまった稟のレベルが一つ上がり、
静華も薬の調合で経験値が上がり、やはりやばい方向性でレベルアップしている。

静也もRPG的に稟とパーティーを組んでいたとかでおこぼれながらにレベルが一つ上がっていた。

本当に情けない……レベルアップの仕方だった。

兄は聖女（女装）を演じる

後編（後書き）

いつもより長くなりました。

四日目

昨日の夜から静也は一睡も出来ずに真っ白なまま灰と化していた。

ああ、可哀想なお兄ちゃんと雫は心の中で思った。

あの勘はまたしても当たってしまったのだ…自分の予想を遥か上回る以上に。

騎士団長の様子が変わたと舞踏会で一緒に踊ったときに気付いていたのだ。

視線は聖女に扮したお兄ちゃんに視線がいき、身長差の為に中腰になるのは分かるがやけに動きが変で音楽と合わず足を数回踏んでしまった…。

しかも、殴ってしまった…ワインボトルで。

今回は流石に相手が相手だけに隙がなかったのだ。

それからエヴァ先生の国語の授業は毎日、午前中だけ教わる。

いろいろな忙しいのに時間をつくって教えてもらっている。

授業に必要なのは異世界の低学年向けの語学の教科書と雫専用の白いチョークと黒板と黒板消しのセットだ！

この白いチョークはエヴァ先生が魔法をかけて作ったいくら使っても減らなくて、防水加工施し、黒板以外の落書き禁止防犯追跡お知らせ機能がついたエコで優れた魔法のチョークを買ったのだ。

それから、勉強したあと雫は城の図書館で絵本を4、5冊借りてくるのだ。

毎晩、静也か静香に読み聞かせてもらう。

雫は焦げ茶色のお下げのカツラにぐるぐる瓶底眼鏡をして目立たな

くしているので、いろいろな場所に動き回れる。

お城の中もいろいろ探索できる。

お城の中には洗濯する人や掃除する人、馬の世話をするや料理をする人、庭を綺麗にする人など、色んな人が専門的に仕事している。

雫はそれらの仕事を見ながら、手伝いをしていのだ。

お陰でここでの生活に慣れるのが速い。

雫が絶賛創作活動中の姉と未だにもぬけの殻となった兄にお昼ご飯を運んでいた時のことだ。

メイドさん達のウワサ話が聞こえてくる。

「ランスロット様がお目覚めになったそうよ。」

「昨日の聖女様の誘拐事件でしょ？」

「そうそう、我が身を楯にして聖女様をお守りしたそうよ。」

「ランスロット様、ステキッ！」

「でも、不思議なのが何でも凶器がワインボトルだったんですって。

」

「アラジン国王もこの件に犯人を追跡するよう指示してないのよっ。

」

「どうしてかしら？」

はい。

犯人はあたしです……。

雫は居たたまれない気持ちで姉の生態確認と兄の様子を見に行こうと速足でその場を通り過ぎた。

今頃、エヴァ先生が忘却の魔法をかけて騎士団長さんの記憶を操作して隠ぺいしているだろうと事は思った。

「…んっ…っう…」

頭が痛いのは何故だ？

ランスロットが目を覚ます。

「お加減はいかがですか？
ランスロット様？」

そう答えたのはエヴァンナ王女だ。

「あのっ、エヴァンナ王女、聖女殿は？」

「ええ、ご無事ですわ。今はご気分が優れないようでお休みになっておいですが、あなたのことをご心配あそばせでしたわ。」

「国王、失礼ながら職務を真つ当出来ず、申し訳御座いません。」

エヴァンナ王女の隣に立っていたアラジン国王は言う。

「お前に落ち度はない。

この件にはもう触れるな。

犯人はすでに分かっている探す必要はない。」

「犯人は誰なんですか？」

「この件には余がもう片付けた。お前が知る必要はない。」

アラジン国王はいいおえるとランスロットの部屋を出ていった。

「ランスロット様、今日はゆっくりお休み下さいませ。それでは、私も失礼致しますわ。」

エヴァンナ王女も出ていく。

一人になるといろいろ考える…

どうにも記憶が曖昧だ。

私は……思い出そうとすると頭痛がする。

頭のタンコブせいだろうか？

私は聖女殿に対して何かにとんでもないことを仕出かそうとしていたような……。

何だか眠くなってきた……な…。

ふと、目が覚めた。

外を見ると月が真上まで昇っている。

少し外の空気でも吸おうとランスロットは灯りを持って外へと移動した。

大聖堂の方から声が聞こえる。歌声だ。

その歌声は聴いたこともない言葉で夜の空に溶け込んでいく透き通った声だ。

大聖堂の向かう度、その歌声ははつきりと聴こえる。

可憐で美しい歌声だ。

その歌は優しくまるで子守唄を歌っているようだ。

歩みより近づくと、大聖堂の中庭でその歌声がふっと止まった。

人の気配を感じたのだろうか。

歌を歌っていた人物の人影が遠くから垣間見えた。

黒い髪の子だ。

黒い髪に知らない言葉の歌と言ったら、あの方しかないだろう。

少女は大聖堂の中庭にある木に身を隠しているつもりらしい。

手にある灯りで照らせば影が見えている。

少女の元へ静かに歩んで行く、

「かお（頭）、み（い）たくないっ！」

少女の方から声をかけてきたが、拒絶の言葉だ。

緊張でもしているのだろうか。声が裏返っている。

歩くのをやめる。

「昨日の夜は申し訳ございませんでした。あなたをお守りきることも出来ず、

あなたに怖い思いをさせました。

すべて私の不手際でした。

それでは、失礼いたします」

少女にそう言いつつ、後を向き離れようと歩きだす。

「まてっ！」

少女は焦って引き留める言葉を言う。

「ごめん。けが、した、めいわく」

少女は裏返った声でそういうと一目散に中庭の木の暗闇から大聖堂の中へと姿を見せずにあつという間に気配が消えた。

どうやら、嫌われていた訳ではなく、少女は自分のせいで怪我をさせたことに謝ろうとしたのだ。

無意識に口元が緩む。

もし、機会があったらあの歌声を聞きたいと思った。

へたれは治らない。いつそのこと憐れだ…。前編（前書き）

P V 2000 ありがとうございます。

途中でボーズ・ラブのマニアックな話がありますので苦手な方は飛ばして下さい。

後編から読んでも差し支えありません。

へたれは治らない。いつそのこと憐れだ…。前編

「朝のラジオ体操第一

ーチャンツチャツカ、チャカチャカ
チャンツチャツカ、チャカチャカ

タタタンツ！

ターン、ターン、タータタタン！

まずは両手を大きく広げて深呼吸っ！ー！

只今、ラジオ体操第一が流れている。

体操をしているのは現在2名。

異世界へトリップした高校生勇者とその一番下の妹。

朝から清々しく、兄妹仲良く体操している。

『小説家になろう』または『小説を読む』を通じてご覧の読者様、
もし異世界トリップで勇者または主人公がラジオ体操をしている小
説がございましたら、ぜひお教え下さい。

もし同じネタでかぶっていたのだしたら、この場をお借りしてお詫
び申し上げます。

もし、ぜんぜん良いと仰られる作者様でしたら、ぜひともお友達
になって下さい。

「お前達、朝から何をしているんだ？」

金髪碧眼に少し声が高い美少年王子様。

「ジャックしゃもじしゃん、おっはーよいござり、つわり…マッス
ル？」

一番下の妹の挨拶に、ジャクソン王子がずっこける。

「ジャクソン王子様、御早う御座りつかりまする。」

兄は妹の代弁を兼ねつつ挨拶する。

今朝、出来れば土下座してお詫びしたい人物の一人だ。

雫の挨拶もその思いでいつぱいに現れている。

その理由は昨日の晩に遡る…。

「扉絵できたよ」

この国に召喚された聖女こと鈴木静華の一言だ。

「お姉ちゃん、今回はどんなの？……ッ!」

勇者と聖女の妹というある意味凄いポジションにいる雫は姉の書いた扉絵を見て固まる。

表現できるならば 雫の今の表情は（。―。）こんな感じた。

何故ならば、その扉絵の人物二人は……

あの騎士団長とエヴァンナ王女だ。

…お姉ちゃんはB Lマンガじゃない王道少女マンガを書き始めた…。

雫のある意味ショックを受けていた。

あの三度の飯プラスおやつよりB Lマンガ本をこよなく愛する姉が……？

衝撃のあまり雫はたぶん勇者？であり兄である静也にもその扉絵を見せる。

今も灰と石化している兄を目覚めた。

「静華っ！この二人はもしか？」

「そうです。ジャクソン王子とランスロット騎士団長」

（（ああ、あなたはいつものあなたのままなのですね……）（

兄と末っ子、重なる心のツッコミ。

しかしなぜ？

ジャクソン王子が登場？

雫が姉、静華が書いたネームを読み始めた。

5分後。

読み終えた雫。

「お姉ちゃん、今回は『男の娘』なんだね。」

「ピンポン！雫ちゃん、大正解っ！」

静華は笑顔で答える。

「男の子？」

「違うよ、『男の娘』だよ。」

女の子のカッコウをした男の子でつまり女装よ。」

兄の問いかけに答える静華。

「お姉ちゃん、今回はこの国で同性愛は抵抗を感じる人、多いみたいだからいいと思うよ。」

けど、か弱い双子の妹の替わりに兄が舞踏会へ行って男だってバレるシーンのヅラがとれて上半身が見えるところは鎖骨から肩のラインまで！

キスのところははっきり書きちゃダメ！

月を背景に二人の影が重なってキスしてるように見せる！」

「え〜。つまんない、乳首もだめなの？」

「こつちの世界の性に関する娯楽的書物では刺激が強いから男の乳首でもアウト。キスシーンも！」

「ジャクソン王子の可愛」

ぷっ……突然、吹き出して笑う静也。

「あはははー。あー面白ー親父とお袋、そのまんま再現したみたいだな…いつも会話はマニアック過ぎてついてけないけどな……」

鈴木三兄妹の父はフリーのギャルゲーシナリオライターで母は父が契約している会社の編集長をしている……

血は水よりも濃いというのが本当のようだ。

変な妹達だがやはり俺の家族なんだな…

俺が早く強くなって魔族を捕獲してやれば家に帰れるんだよな。

この際だ！

雫に合気道（護身術）を習って強くなろう！そう心に決めた兄、
静也の決心だった。

しかしながら、雫よ君はいつたどこまで知っているんだ。

やはり怖くて聞けない。兄の静也だった。

そして、話は最初に戻る。

へたれは治らない。いつそのこと憐れだ……。後編

『知らぬが仏』

という言葉がある。

今はその時だろう…。

たぶん、本人ためにもその方が良いのだ！

鈴木三兄妹の必殺、アイコンタクト！！

王子二八内緒ダ！

イエス、マイブラザー

二人の視線での会話が成り立つ。

「ところで朝早くから何をしようとしているんだ？」

「たんめん」

「合気道の稽古です。」

「面白そうだな。見学して構わないか？」

「ぴん」

「ぜひ、どうぞ。」

雫はやや聞き取りができているが発音はイマイチのようだ。

朝の稽古は上手く転ぶことと雫に投げ飛ばされて擦り傷ができた。

「お前の方が強いのだな…、最初は頭のネジが一本とんでいるかとおもったが、小さいながらに苦労しているんだな…」

「きょうだい、しり、さわる、あたり、お前。」

「……兄妹ですから、…尻拭いは当たり前です。」

兄、代弁で名誉挽回できるか…

「…そうか…」

出来なかった。

「そうだ、エヴァの授業の後にも馬に乗ってみるか？」

乗馬のお誘いだ。

「びぎ、たのむ」

「ぜひとも、楽しみです。」

そして、

勇者の一番下の妹、雫は兄より100m先に秀でていることが判明した……

乗馬と体術においては。

これには、流石のジャクソン王子も驚いている。

「勇者の妹は、今まで乗馬の経験は？」

「いや、初めてはず……です。たぶん……」

いつの間に馬に乗れるようになったのだろうか……。

それよりも、俺も負けてはいられない。

白馬だか黒い毛が混じって牛のような馬のモーシーに乗ろうとするが、

モーシーが急に走り出す。

なぜ？

走行する内にモーシーが

イヒヒーンッ！

といもなく。

目の前には木に干してある真っ赤なシーツに興奮したらしい…。

大きく前足を上げて落馬する勇者。

勇者は受け身になり、衝撃に備える。

どっぴんっ！

どっぶん？

泥沼に落ちた…。

すごく臭い。息も出来ない、目も開けたくない。

頭から突っ込んだので足をばたばたさせる。

が、逆にどんどん沈んでいく勇者、静也。

「お兄ちゃんっ！いま、助ける、じっとしろ」

ああ、末っ子の声がする。

「どうやって、引き上げるのだ？」

ジャクソン王子も一緒だ。

雫はいきなり上の服を脱ぎ始める。

「えっ？おい！！女の子が…」

言いかけてジャクソン王子が目にしたのは、

胸部から腰辺りまでしっかりした縄紐を身体にぐるぐる巻いた雫だ。

その縄紐を身体からほどいて兄の足にしっかり結びつけ、雫が乗っていた黒馬のキャシーの後足にも結んだ。

「ジャックおじたま、うま、はしる」

雫がジャクソン王子に言い、急いで馬を走らせる。

泥沼いや本当は肥溜めに落ちた勇者を黒馬に乗った王子に足を縛られ馬に引きずり回され無事救出された。

勇者の静也、糞尿まみれでしばらくそのまま馬に引きずり回されて

いた。

何かの罰ゲームみたいだ。

その後、風呂に入っても臭く、エヴァンナ王女に消臭の魔法をかけてもらったが……。

妹達以外、しばらく勇者に近付く者はいなかった……。

へたれは治らない。いつそのこと憐れだ…。後編（後書き）

勇者としてあるまじき由々しき出来事

『小説家になろう』または『小説を読む』を通じてご覧の読者様、もし異世界トリップで勇者が肥溜めに落ちて王子様に助けられる小説がございましたら、ぜひお教え下さい。

もし同じネタでかぶっていたのであれば、この場をお借りしてお詫び申し上げます。

もし、ぜんぜん良いと仰有られる作者様でしたらぜひともお友達になって下さい。

うちの聖女、覆面？BLマンガ作家になる

「できたによ〜。」

そう言ったのは、目の下にくまを作り眠そうな顔をした残念な美少女ことこの国の聖女、静華だ。

彼女は創作活動開始から72時間1分12秒経過して50ページのBLマンガ本を一本書き上げた瞬間の一言だ。

1分12秒！記録新更新。

「後は雲、たのんだにやり〜」

ばたんっ。

聖女がベッドに倒れた。
眠っている。

そっとしておこっ。

次の日の朝、聖女は寝ている。

そして、次の日の朝も聖女は寝ている。

また、次の日の朝も聖女は寝ている。

やっと次の日の朝、聖女が目を覚ました。

「ああ、良く寝た」

ええ、それはもう寝ましたとも

たつぷりと。

静華の顔色はすごく良くなり、目の下のクマもなくなっている。

ぴちぴちの女子高生に戻っている。

「あれ？ 雫、服変わったね。どうしたの？」

「聖女様の専用侍女見習いになったの。」

雫の普段着に着ていた灰色のワンピースに白いエプロン姿だったのが、若草色のワンピースに白いエプロンと上品な服装になっていた。

それから、静華の部屋には、花瓶が5つに増えている。

増える花瓶の謎。

「その花瓶のお花、どうしたの？」

「すべて騎士団長さんから毎日、お姉ちゃんのお見舞いにきて置けます…。」

「そう、よく頑張ったね。雫、ありがとう」

さすがの静華も勝手に他人をモデルにして書いたことに多少の罪の意識がある。

兄は別だが……。

「雫、それより原稿は？」

「複写紙の呪文でエヴァ先生に200部作ってもらって、こっそりお城で働く洗濯場のお姉さんやメイドさんに渡した。」

「で、その後の反響は？」

「300部増刷決定！」

本日、城下町にて緊急サイン会だよ」

「やったー！」

喜ぶ静華だが、

「でも、私がこのまま城下町に下りて大丈夫？」

「大丈夫。はいこれ。サイン会で被ってするように、あたし作ったよ。」

静華に雫から手渡されたのは、2つのお面。

1つはふくよかなおかめのお面。

もう1つは狐の可愛いお面。

末っ子の無難で可愛いお面だ。

静華は本日より狐の可愛いお面と金髪のカツラを被って城下町でひっそりとサイン会と行なったのだか……

増刷されたマンガ本はものの5分足らずで売り切るといって売れ行きで、さらに増刷が決定した。

聖女、静華のBLマンガ本作家として異世界での活躍は素晴らしい
第一歩となった。

聖女付き侍女見習いと騎士団長の攻防 前編

こん、こんっ。

扉を開けるとそこには雫が一番会いたくない人

アデイストリア公国第一騎士団長、ランスロット・ハーバードがいた。

「えっと、あなたは…先日の舞踏会でエヴァンナ王女といらした…お嬢さんですね。」

名前忘れられている…。

「はい」

「聖女殿は今、お会い出来ませんか？」

「聖女様（お兄ちゃん）は、入浴中。出来ません。」

ある意味真実を語っている雫だ。

肥溜めに落ちたばかりの勇者が入浴中だ。
その前にきちんと近くあるに人があまりいない池に放り込んで置いた雫だ。身内には容赦がない。

鈴木三兄妹は同じ部屋といっても大きい部屋と小さな部屋が繋がっており、さらにトイレと風呂がついた部屋と一緒にいるのだ。

本来なら別々の部屋になる予定だったのが、言葉が分からない未っ子の雫が寂しくないように国王が配慮してくれたのだ。

「騎士殿、おかわ（え）りください。」

「そうですね、それでは日を改めて伺います。あとこれはお見舞いの花です。」

そう騎士団長は雫に花束を渡し、頭を手で軽く撫でて、笑みをみせてそのまま立ち去っていった。

しかしながら、後頭部のタンコブはまだ治っていないみたいで申し訳ないと雫は心の中で謝ったのだった。

＊＊

次の日の同じ時間帯。

「雫、この1コマ目、薔薇のトーンお願い。」

姉の静香は妹兼アシスタントの雫にいう。

「はい」

妹の雫は姉のアシスタントをここ一年程前から手伝うよう仕込まれたのである…。

が、残念なことに君の妹は腐女子ではない。

専門的知識や18禁を抵抗無く平気で読んで育ったため勘違いされやすいが、ノーマルである。次いでに兄も。

鈴木三兄妹の長女、静香だけがブラックでディープなアウトアブノーマルに育ってしまったのである。

鈴木三兄妹の父、健太郎と良く似ている。

親子で犯罪すれなことをしでかすので、いつも不安だ。

こん、こんつ。

扉をまたしても叩く人物が居る。

この部屋に辿り着ける人物は部屋の主と王族のあの3兄妹と宰相のルイズラムと第一騎士団長のみ。

あとはこの部屋自体に魔法がかかっており、一度部屋に入ったことがあるものか、それを許されたものにしかこの部屋に辿り着くことが出来ない。

創作活動中の姉は、全く聞こえていない。素晴らしい集中力だ。

兄も今いないので仕方なく雫が出るしかない。

二回目の攻防戦が始まる。

「こんにちは、騎士殿。聖女様はべんざ（勉強）に、はげ（ん）でいます。」

誤解を招くような発音はイマイチ伝わるのか？

「……………そうですか…」

伝わらなかったようだ…。

「あの、お邪魔してしまったようですが、聖女殿にお会いできるまで中待っ」

「で、出来ませんっ！」

やばいです。アナタが主人公のマンガ本を書いているのがバレしまう。

これはまだ鈴木家の兄妹とエヴァンナ王女のみが知る極秘事項…。

すると、ランスロットは白い高級なハンカチを取り出して雫の頬を拭う。

「お嬢さんのお顔に黒いインクがついてましたよ。」

ああ、危ない！
マンガを書いてる時についたインクだ。

雫はランスロットのハンカチを手にとって、

「洗って、忘れます。」

「……？、洗って渡して下さると？」

「はい」

今のは上手く伝わらなかったようだか、理解はしてくれたようだ。

洗ったら、いまだに臭い匂いを気にしていた兄の為に、用意して貰ったお香でも使ってお返ししようと思っただ。

「これをどうぞ。」

騎士団長は小さな紙に包んであるものを開いて雫に差し出した。

「あめ？」

「ええ、そうです。口を開けて」

言われるまま、飴を雫の口に持っていき、ころんと飴が雫の口に入った。ランスロットの人差し指が雫の唇に軽く触れる。

「あまいっ」

「そうですか。それは良かったです。お嬢さん。」

につこり笑顔を見せる雫に、騎士団長はまた雫の頭をぼんと手を軽く置いて撫でた。

「それでは、これを聖女殿にお願いします。では失礼します。」

「はい」

ランスロットは雫に花束を渡すとその場を去っていった。

ああ、良かった。と、頭のタンコブの腫れがだいぶ治っているのを確認してほっとした雫であった。

＊＊

聖女の静華が眠りこける前の姉と妹の会話。

「ところでお姉ちゃん、騎士団長さんってどついつキャラかな？」

「うーんと、そうね。天然のタラシかな？あと好きな男ができれば、一途ですごく情熱的になるの！」

「ふーん。なるほど、なるほど」

気を付けなければなるまい。

姉のモデルキャラ設定はほぼ当たる。（男が好きになるのは全部外れるが）

なんたってエヴァンナ王女の許婚いいなずけなのだから！

兄の二の舞にならないようにあたしがしっかりしないとっ！

そう心に決めた事であった。

聖女付き侍女見習いと騎士団長の攻防 中編

金髪碧眼の美少女が麗しく本を読んでいる…。

タイトルは、

『月影の蜜事^{つきかげのみこと} いけない恋のはじまり』

作者 ジュリエット・シャーロック

「……まあっ！、素敵でしたわ。お兄様は受け身、ランスロット様… 違いましたねオスカー様がまた情熱的に自然と攻め行くところ… 月明かりの下、二人が交わす秘密の口付け… 萌えっとはこのことなのでしょうね！生まれて初めて味わう感情なのでまだときどき致しますわ。」

これが読み終えた感想だ。

彼女こそこのアディストリア公国の王女にして月の精霊に愛されし巫女姫なのだが…、

今読んでいた物は、自分の実の兄と許婚がモデルになっている…。すでに腐王女になりつつあるエヴァンナだ。

「ところで、シズクはこの原稿をいつもどうするのですか？」

「コピーしてました。」

エヴァンナの教え子の事は言う。

「コピーとは？」

飲み物になってます。

「はい。コピーとは、同じものを写します。」

「それは、この呪文でどうでしょうか？」

【 】

呪文を唱える、エヴァンナ。

すると、近くにあった紙が浮き上がり、一枚目の扉絵と重なって絵が浮かび上がる。

「すごいっ！エヴァ先生」

「これは複写の呪文です。これでコピーと同じ作用ができると思うのですが？」

「はい、出来ます。」

「では早速、いくらでもつくりましょうね。シズク」

エヴァンナの瞳の奥がメラメラ萌えていた。

「…100から200部くらいでいいです。……エヴァ先生。」

エヴァ先生は完全に腐女子だと雪は思った。

複写の呪文で完成した200冊のマンガ本を自分の住まう部屋に運

び込んだ雫とそれを手伝わされた兄の静也。

こん、こんっ。

また…、あのランスロット騎士団長だろうか。

今は部屋に入れたら非常によろしくない状態だ。

兄の静也はあの出来事をまだ引きずっているのか、

「俺は居ないことにしてくれ……」

と言い、顔色が真っ青になっている…。

兄はあの魔法のカラクリ壁に可哀想なので隠して置いて置く雫。

息をのんで扉を開けた雫。

「こんにちは、騎士様、ただいま、聖女様はお休みです。お帰り、

くだされ。」

かなり異世界の言葉が堪能になった雫。

「こんにちは、お嬢さん。聖女殿はお休みですか…。」

残念そうな顔するランスロット。

女の子だったら、その整った顔に憂い帯びた表情は乙女たちの心をグツと掴むのだが、雫は乙女だが、今は腹と背にかえられない状況にいて必死だ。

「それでは、勇者殿はいらっしゃい」

「勇者様は居留っ……いつ居ませんっ！今洗濯中です。」

「……勇者殿は自分で洗濯を？」

「してません。あたちが洗ってます。」

何だか会話がずれてきている。

「お嬢さんは一体」

「あたちはお世話をします！」

「…ああ、侍女なのですね」

「は、はいっ！」

この場を上手く収まりそうだと安堵する雪。

「…それでは、お嬢さんこれを」

「聖女様に忘れます。失礼します。」

とランスロットの手から花束を奪うようにとる、一刻も早くこの場を終わらせ離れたい雪だ。

「お待ち下さい。お嬢さん、これをどうぞ」

引き止めの言葉に戸惑うがランスロットの手には沢山の飴が入った瓶を手にしている。

「これをあたちに？」

「ええ、昨日喜んでいたので、食べませんか？」

「食べるー」

「どうぞ。」

ランスロットは雫に飴の入った瓶も渡すと、また、雫の頭に手を置いて頭を優しく撫でると、その場を去っていった。

今日も危なかった！

でも、何で毎日来るんだろうと思う雫だった。

聖女付き侍女見習いと騎士団長の攻防 後編

そこには、一冊のマンガ本が置いてある。

「これって、ランスロット様とエヴァンナ王女様じゃない？」

一人のメイドさんが読み始めた。

想像して見て下さい。

「ええー。男の子だったのー！」

「あつ、え、うつつそー、抱きしめて…月明かりの下で影が……」

「…美少年と美青年って絵になるわ、これは他の娘にも見せなきゃ
」！
」

このメイドさんの掴みは良いようだ…。

本日、１００冊をエヴァンナと雫の手に寄って秘密裏に城の女子達

に配われた。

＊＊

騎士達が今訓練している訓練所。

一人の小さな女の子が物珍しそうにきょろきょろしている。

若草色のワンピースに白いエプロンに焦げ茶色のお下げにぐるぐる
瓶底眼鏡をかけた女の子だ。

この場所では目立つ存在だ。

小さな女の子は誰か探している。

騎士や従者に剣の指導をしている茶髪の青年を見付けると近付いて
いく。

目的の人物を見つけたようだ。

ここでは珍しい小さな女の子に剣の指導をしていた青年もすぐにその存在に気付いて視線があう。

「皆、しばらく休憩だ。キール、後は頼む」

「え、アタシが？解りましたよ。またアナタ、今度はずいぶんと可愛い女の子をたぶらかしたのね。イケナイ子ね。」

そう紛らわしい発言をしたのはこの第一騎士団の副団長のキールだ。

「いや、違う。あの子は異世界から来た勇者と聖女の可愛い侍女さんだよ。」

「へえ、あの子が肥溜めに落ちた勇者の…ね。」

「…ああ」

二人とも微妙に勇者に対してのイメージが壊されてしまった被害者だ。

騎士として勇者は懂る存在！それが……

勇者が可哀想なのでこれ以上は辞めよ。

茶髪的美青年、この国の第一騎士団長、ランスロットは小さな女の子に寄っていく。

「こんにちは、お嬢さん。今日はあなたから来て下さったのですね。」

「こんにちは、騎士様。今日はこれ、あなたに…渡すです。」

そう言った少女の手には白いハンカチが差し出されている。

先日、ランスロットが雫に貸したハンカチである。

ハンカチを受け取ったランスロットに雫は言う。

「騎士様、もうお見舞い来ないで下さい。」

「いきなりどうしたのですか？」

「騎士様と聖女様、へんなウナギです。迷惑です。」

「…そうですか？、残念ですが、私は諦めるつもりはありませんよ。」

「なぜ？」

「解りませんが、このまま私を襲った犯人をこのまま伸ばしにして置くわけいけない気がして…」

その言葉を聞いた侍女見習いの少女は青ざめる。

犯人はあたなのすぐ目の前におりますが…。

あれは緊急事態で仕方なく殴ってたのだ。

「でも、王様がもう大丈夫だって、言った。だから、もうお見舞い

来ないで下さい。」

そう言つて、雫は足早にその場を去つていった。

＊＊

その同じ日の夕方。

こん、こんつ。

いつもの青年がやってきた…。

ううーまた来たと雫は思いながら、仕方ないので扉を開ける。

「騎士様、聖女様はお休み中で、勇者様はいらっしゃいませんが、中へどうぞ。」

「…よろしいのですか?。」

「はい」

今日は魔法のカラクリ壁にすべて例の物を隠してある。

中に入ると応接できるような二人掛けのソファとテーブルのセットに奥には大きなベッドがあり、黒髪の少女が眠っていた。

ランスロットはやっと会えた少女に近付いてく顔を覗き込む。

すると、ランスロットは黒髪の少女こと聖女の静華の黒く真っ直ぐで美しい髪に触れる。

お前、お姉ちゃんに近付き過ぎっ！雫がそう口にした時…

「んっ、ランスロットさ、まあ…」

姉の静香が寝言をいいランスロットの手が、静香の顔の近くにあつたので、自分の頬に手を擦り寄せたのだ。

「うっほんー」

大きな咳払いをする雫。

その咳払いにびくつと雫の方を見るランスロット。

「もうお帰り下さいませ、騎士様。」

「あつ、はい…」

雫はランスロットを急かして部屋から追い出した。

あのシチュエーションはたしか変態のお父さんが『こう寝顔で自分の名前を呼ばれて頬擦りでもされると男は皆、どっきゅんって心を揺さぶられてオオカミさんになっちゃうから気を付けるんだぞー』って言っていたのとまったく同じだ。

あたしあまり良くないフラグを立ててしまったと雫は一人悩んでいた。

今回もちやつかり花束を置いていったランスロットであった。

その頃、静香の夢の中では…

ジャクソン王子とランスロット騎士団長が…

ピ
を啄むように貪りあい。

ピ
をピ
に挿入した。

激しく愛し合う二人。

次の日の朝、ジャクソン王子はランスロット騎士団長の自分の頬を
手にし、優しく頬擦り愛しい人の名を呼び…。

BL万歳な姉の静香の夢だ…
きつと次の話のネタになるだろう。

＊＊

次の日のまたまた同じ時間帯だ。

雫は明日のサイン会の手配とお面を作り終わって安心していた。

しかしながら、何故雫が世の中の半数の男性が怖くて読めない敵に回すようなマンガ本を売ろうとしているのか不思議に思う人があると思う。

それは姉の静香が大好きだからだ。

姉の静香が大切にしているものを壊したくないし、受け入れている。だから、自分ができる範囲で手伝ってしまふ。

普段から仲の良い姉妹（兄は？）なのだ。

姉の喜ぶ姿が好きなのだ。

こん、こんつ。

また…。

仕方なくでる雫。

「こんにちは、騎士様。ご用件は？」

「こんにちは、お嬢さん。今日はあなたに贈り物があります。」

「あたしに？」

「はい」

すると、ランスロットは膝について雫の焦げ茶色のお下げに青いリボンを結わえる。

「良くお似合いですよ。お嬢さん。」

「ありがとうございます。騎士様。」

「騎士様じゃなくて、ランスロットです。」

「らんするつど様？ですか」

「ええ、お嬢さんのお名前は？」

「聖女付き侍女見習い1号です。」

「……それは、ダメです。」

なんですか！

「えーと、エヴァンナ王女の教え子のA子です。」

「……きちんと教えは頂けないのですか？」

「初めて会った日に、エヴァ先生から紹介して貰ったはずですが……」

「……………モズク？」

「失礼します！」

雫は勢い良く扉を閉めた。

モズクはないだろう、海蘊は！と雫は思った。

しかし、カツラのお下げに結って貰った青いリボンは嬉しかった。
花束はまた貰ったのだが、やはり聖女の兄か姉宛なのか知らないが
そう思うと胸の奥がきゅうと痛むは何でだろうと雫は思った。

＊＊

次の日、同じ時間帯。

今日は兄の静也が一人でいた。

妹達は城下町でサイン会だ。

兄の静也は毎日、朝は合気道（護身術）を末っ子の妹に習い、午後は乗馬（キャシーしか乗れないが）や体力つけるべくジョギングをしていた。

今日もジョギングでかいた汗を風呂で流し休憩していた所だ。

こん、こんつ。

妹達が帰ってきたのかと静也は思い、扉を開ける。

「おか、わりください…」

前にも聞いたことがある言葉。

とそこには、ランスロットがいた。

これが本当の意味での勇者と騎士団長の初対面だった。

聖女付き侍女見習いと騎士団長の攻防 後編（後書き）

思ったよりも長くなりました。

お付き合い下さりありがとうございます。

初対面！

ここに、固まる人物が居る。

この部屋の主、勇者の鈴木 静也（17）がとある人物を見て固まっている。

その人物こそ、アデイストリア公国の第一騎士団長、ランスロット・ハーバード（25）なのだが…。

花束と甘い焼き菓子を手に部屋の前に立っていた。

男同士見つめ合う…。

「こんにちは、いつもの小さな侍女さんではないので驚きました。」

「ああ、栗のことか。」

「…シズク。」

「栗が何かしたか？」

「いえ、小さいのに偉いなど。」

「そんなに小さいか？雫はいくつに見える。」

「6、7歳位でしょうか？」

「……そうか。」

今は末の妹が聞いたら、ある意味ショックを受けるに違いないだろう。

妹の実年齢を教えてやろうかと考えていた兄の静也。

「そう言えば、あなたは聖女殿（静香）の兄上でしたね」

「ああ、妹（雫）から話は聞いている。いつも見舞いに来てるって、第一騎士団長のランスロット・ハーバードさんだよな。」

「私のことをご存じでおいででしたか。」

ああ、すでに会ってる二人。

「とりあえず、せっかく来てくれたんだし。今、妹いないけどお茶くらい飲んでいくか？」

「ええ、是非。」

部屋の中に入るランスロット。

「とりあえず、そこら辺に座って、今はお茶出すから。」

そう言って、静也は慣れた手つきでお茶を入れ始めた。

がちやつ！

「「たっだいまあゝ」」

元気良く、妹達が帰って来た。

「あれ？お兄ちゃんと…！！」

聖女の静華は見馴れない客人を目にして思わず裾の長いスカートを踏んづけてよろめく。

静華が倒れそうになるのを抱きとめるランスロット。

静華はランスロットの腕の中にいる。

静華はランスロットの意外にもしっかりと鍛えられた厚い胸板に抱きとめられ、少し興奮する。

「大丈夫ですか？聖女殿。」

さらにそのぐつと腰にくる美声で耳元で尋ねられ顔が真っ赤になり、静華とランスロットの視線が合う。

つうーと静華の鼻の下から赤い液体が流れ落ちていく…。

ああ、ランスロットの服にまで鼻血がついている。

静華の鼻血放出だ！

テクニカル大ヒットだっ！！

説明しよう！

姉の静香は、好みの美少年や美青年を見ると脳内妄想がヒートアップし激しく萌え尽きてしまい処理しきれなくなってしまう。
そこで鼻血を放出してしまうのである。

「あー、とりあえずベッドに俺が静華を運ぶから零は騎士団長の風呂の支度頼むな。」

「はい」

この場で一番、冷静なのは兄の静也だ。

さすがに妹の対処に慣れている。

ランスロットの服には無惨な鼻血の後がべっとりとついてしまっている。

他の人が見たら大怪我をしていると大騒ぎになるくらいだ。

＊＊

仕方なくこの部屋で風呂で入ることとなったランスロットだった。

ランスロットは今、勇者と聖女の兄妹の部屋にある風呂に浸かっていた。

何故こんなことになってしまったのかとランスロットは思った。

初めて会う勇者は青年というにはまだ少し若い少年だった。

実際、会ってみたが打ち解けやすく好感が持てる少年だったし、冷静で判断ができる落ち着いた所もある。

逆に聖女は身体が弱いようだ病気がちで伏せているみたいだ。

鼻血もそのせいだろうか。

と、湯船からあがろうとしていた時に…

「騎士様、お背中でも洗いますかー」

風呂場に入って来た雫。

ランスロットは思わず雫の顔をじいつと見つめている。

「……しし、ししし」

「獅子舞い？」

雫がツツコミを入れた。

「…シズク、ですか？」

「はい」

「えっと、いつもの眼鏡はどうしたのですか？」

「湯気で眼鏡が曇るので外してますが何か？」

「い、いえ。何でもありません。もうあがりますので、大丈夫です。」

「そうですか？では何かありましたら、お声をかけて下さい。」

そう言い残して、雫はその場を去った。

びっくりしたいつもの小さな少女の素顔を初めて見たが、とても愛くるしく、ランスロットが想像していたより可愛いかったのだ。

思わず、見とれてしまうくらいにランスロットを見て…

今自分がどういう姿でいたのか思い出した。

生まれたままの姿を少女に曝してしまったとランスロットは思い、

赤面した…。

変化する勇者の剣

「お兄ちゃん、準備はいい？」

「ああ、いつでもかかって来い！」

「でやあっ！」

末っ子の勇ましいかけ声で正面から技をかけてきたが、

「あれっ？」

雫は兄の静也によって腕を返され、手首と肘、肩が極めて倒されて一教が見事に決まっていた。

「やった…？」

自分でも信じられいが末の妹を倒したのだ。

「強くなったね。お兄ちゃん。」

「ああ、やつとここまでできたか…」

静也はここ数日のことを思い出した、数百回に及ぶ妹に投げ飛ばされ続けた記憶が走馬灯のように流れて…

ああ、何か泣けてくるのは何故だろうか。

「お姉ちゃんも3日で基本的な技、覚えたんだよね。」

「ええ！静華が？なんでまた…、もしかしてあれのためか……」

「…うん。鬼畜俺様系の服従奴隷もの描くためとかで……」

「……。」

「……。」

「さすがのあたしもそれは手伝ってないし、読んだことないよ。なんか怖くて……」

ああ、良かった。雫はまだあれじゃあなくて、お兄ちゃんは安心しました。

それより、静華はどんどん遠い世界の住所に既になってしまっていたのかと思うとお兄ちゃんは知りたくなかったです。

兄は妹の静華の将来を考えるとまた何故か泣けてきた…。

朝の稽古の内緒の鍛錬場から（アラジン国王陛下が特別に用意してくれた室内場）自室に戻ろうとしていた時、エヴァンナ王女と会った。

「おはようございます。シズヤ様、シズク。」

エヴァンナは天女の如く美しい少女でこの世界に鈴木三兄妹を召喚した張本人だ。

「「おはようございます。」」

二人そろって挨拶する。

「シズヤ様、本日はおめでとございます。レベルが一つ上がっております。」

「本当ですか。」

「ええ」

喜ぶ静也にエヴァンナが言う。

「もしかしたら、勇者の剣に変化が御座いませندでしたか？」

「今日はまだ、これから確かめて見ます。」

そうして、静也達は部屋へと移動した。

＊＊

自室にて鈴木三兄妹とエヴァンナが勇者の剣の変化を確かめ為に見守る。

2週間程前に『竹光』というものを引き抜いた勇者が今ここで試されようとしている。

静也は息を飲んで勇者の剣を手にし引き抜く。

かちやつ。

音を立てて引き抜いて剣がその姿を現した！

「まあ！見たことない形ですわつ。」

エヴァンナは感嘆の声をあげる。

確かにこの世界では見たことないと思うが…、

日本人ならば一度や二度、テレビで見たことがあるものだ。

特に時代劇などで。

その剣を見た鈴木三兄妹たち。

「えっと、お兄ちゃんって勇者だよね…？」
と静華のコメント。

「…一応。」

ぼそりと呟く兄の静也。

「うん、でもこれ。武器にも補具にもなるね。防具にも短棒術とか柔術でも使えるよね。」

と答えた雫。色々なヒントをありがとう末っ子よ。

もうお分かり頂けただろうか。

変化を遂げた勇者の剣はなんと！

『鋼鉄の十手』だった。

今ここに、新たな『十手術の勇者』が誕生した瞬間だった。

英雄王と龍の涙

アディストリア公国

おとぎ話『英雄王』

むかし、むかし。

このくにのおうさまはにんげんをたべたり、おそつてくる まぞくをたいじするためにたびにでました。

いちばんたかいやまにのぼり、まおうのくびをうちとつたおうさまはそのくびをもちかえりくにのはんえいとちからのあかしにかみさまにまつられました。

おうさまはくにのためにはたらいたえいよとたたえて、たみからは『えいゆうおう』とよばれるようになりました。

アディストリア公国の王家三兄妹と鈴木三兄妹とルイズラム宰相が

集まってこれからの『魔族保護』の話し合いを執務室で行われようとしていた。

もう二人呼ばれているものがある。

トン、トンッ。

「入れ」

アラジン国王陛下が言い、執務室の扉が開かれた。

訪れた人物はランスロット第一騎士団長とキール副団長だ。

二人ともいつもとは違う様子を感じていた。

「陛下、私達をお呼び立てしたご用件は？」

ランスロットが単刀直入に言う。

「ああ、お主達に極秘任務がある。これから異世界から来た勇者と

供に隣国のエタリーナに向けてもらい、ある場所に魔王の子が捕まり売られたと情報が入り、その魔王の子を保護しこの城へと連れて参ることだ。」

アラジンは簡潔に用件を述べる。

「何故、魔王の子を救おうとなさるのですか？」

「それは、私がお話致しますわ。ランスロット様」

エヴァンナが答えた。

「私たちの父、アレキサンダーが魔王の首を切り落とし、この国に持ち帰ったことは、国民の全てがご存知かと思えます。」

「ええ、アタシ良く知ってるわ。『英雄王』はおとぎ話として有名なねえ？」

副団長のキールが言う。

「はい、英雄王は先王がモデルとなったおとぎ話ですが、魔王を退治した真実は全く違うのです…。」

エヴァンナは話し続けた。

「龍の流す涙には不老長寿の効果があると代々言い伝えられていました。

父は病気がちで身体の弱かった私達の母、リーナ王妃の為に龍の涙を魔王を探していました。

当事、卵を産んだばかりの魔王の龍を父は殺し、わずかに流れ落ちた龍の涙の一滴を手に入れて母に飲ませたのです。」

エヴァンナは少し辛そうな表情だった。

「随分と英雄王の話と違うだろう。

当事は兄上を身籠っていた母上は出産で命を落とすかもしれないと医師に宣告されていたのだ。

父上は母上や兄上の命を守りたい一心で龍の涙を手に入れて、母上は元気になり、兄上や僕、エヴァンナが生まれたが10年前に母上はなくなった。」

エヴァンナの替わりに話を続けたジャクソン。

王妃リーナは10年の延命をし、行き長らえた。その際、老いや病気は一切なかった。

「しかし、余や母上が助かったその後が父の功績を真似て、魔族狩りが流行りだし魔族の数が激減に減っていった。魔族に対して人間は酷い行いをしている。」

そこで余は異世界から三兄妹の召喚を妹に頼んでもらった」

最後にアラジンが語ったが、

「三兄妹？」

二人の騎士は異世界から来た勇者達の兄妹に声を揃える。

「ランスロットは実際に3人に会ったとエヴァンナから聞くが…」

（あら、どうでしょう。忘却の魔法で必要な情報まで吹っ飛んでしまいましたのね）

「すみませんでしたわ。私としたことがランスロット様にはシズクのことをシズヤ様とシズカ様の妹と申し上げておりませんでしたわ」素直に謝るエヴァンナに二人の騎士の視線が末っ子の雫へといく。

雫は視線から避ける為に兄の後ろに身を隠した。

（ああ、お兄ちゃんを頼ってくれるのか）

静也は内心、嬉しく思った。

静也は妹思いだが、シスコンではない。絶対にありえない。特に静華に対しては。

だが、副団長のキールが近づいて雫をがばつと羽交い締めにした。

「ちっちゃくて、可愛い！アタシ、カワイイのダースキなの。ほったもすべすべのぶにぶにでむしゃぶりつきたーい」

紫がかつた金の長い髪を後ろに艶やかな花の簪でかんざしまとめて瞳は夕焼けの日が沈む寸前の紫と赤が混じりあった不思議な色だ。容姿は男か女か迷うほど妖艶で色っぽいが男である。

雫はそんな男に行きなり羽交い締めされ、自分の頬を相手の頬に擦り寄せられて完全に混乱している。

「い、やあっ！」

雫は技を使った。

どきー！

キールは見事にキレイに投げ飛ばされた。

雲のレベルがまたひとつ上がった。

ちなみにキールはロリコンではないカワイイものと子供がただ好きなだけなのだ。

「あの、ごめんなさい」

投げ飛ばした相手に謝る雲にキールは、

「いのよ、びっくりさせちゃったアタシのほうが悪いわ。ごめんなさいねえ」

キールはいい奴だ。

「しかし、魔族の子を捕まえようするのですか？」話を戻したのは召喚された勇者の静也だ。

「それは、魔王の子の中に人語と魔族語を理解し話す者がいるからなのです。」

ルイズラム宰相が言う。

「本来、魔族と人間は話す言葉が違いますが、魔王の子には人間との間に生まれた者がいるのです」

「それで、魔王の子を探し出す。必要があるんだな」

静也は魔王の子を探す必要が解り納得する。

「今回の旅の目的地であるエタリーナには私と勇者殿と騎士のランロットがキールと向かう予定です」

「私と雫は？」

「今回は女性や子供には危険な所ですので、勇者殿だけにご同行し

ていただきます」

「それでしたら、お願いがあります。」

「为什么呢？」

ルイズラムが言う。

「植物研究園での入室許可と植物の採取をしたいのですが宜しいでしょうか？」

静華の願いにルイズラムはアラジンを見ていいだろうと視線を送る。

「いいでしょう」

国王陛下から宰相を通して許しを得た。

「ありがとうございます」

静華はにっこり笑顔を見せる。

（今回は大丈夫だよ。お兄ちゃん）

（本当か？）

（うん）

今回の姉に黒いオーラがない。

雫のこの勘は外れたことがないので、安心した兄の静也だった。

＊＊

ここはアディストリア城内の植物研究園である。

様々な植物があり、観賞植物から医療薬草、食物の品質改良など幅広い目的で植物の研究が行われている。

静華と雫が旅立つ兄の為に薬の材料を採り来た。

「あつ、これがキズとヤケドに効く塗り薬のキズアトノコサズ草ね
！」

静華が名前が描かれた草を見付けて摘み取る。

「お姉ちゃん、これ、トリハダ サミシイ根で読むのかな？」

雫は近くにあつた植物の名前を読みあげるが：

「ヒトハダ コイシイ根だよ。」

静華は興味を持ったようだ。

「でもお兄ちゃんとお姉ちゃんはすごいね。
こつらの世界の言葉もペラペラだし文字もスラスラ読めるんだもん。
どんな感じなのかな？」

雫は今まで不思議に思っていたことを静華にきいた。

「んーとね、言葉にすると難しいね。」

言葉は本当に自然に日本語で話してたかと思ってたから、雫に言われるまで気付かなかったし、文字も自動翻訳されて不思議なのよね。」

「そっかあ、いいなあ。私ももっと文字読めるになりたい。」

およそ半月ほどで日常会話が出来る雫の順応性の高さにお姉ちゃんは逆にすごいと思いますけど…。

「でも気になるね。ヒトハダ コイシイ根って一体どんなものなんだろうね？」

と雫がその植物を指をして言う。

「うん、そうだね。」

「引き抜いてみようか。」

好奇心旺盛な二人は、ヒトハダ コイシイ根の長い葉を掴んでずばっと引き抜いた。

「いや〜ん」

「……。」

そこには、人参に似た橙色に二又にわかれた根っこが声をあげて姿を現した。

腰をくねらせているかのように見える……。

「この根っこ何に使うんだろうね……。」

「図書館にある本でなんか見たことあるかも。せっかくだし、後で作ってみようね。」

「うん」

二人はその後いくつかの薬を作った。

そして、あのヒトハダ コイシイ根を使った薬のレシピは残りの材料に唐辛子と鷹の爪とフカヒレに燕の巣とトカゲのしっぽをすり潰して煮詰めて完成した。

『せいめいよくきょうりよく
性欲欲協力増幅液』

効用：性欲と生命力を高め増幅させる

備考：一滴で効果抜群

二滴で中毒者爆発

三滴で限界致死量注意

薬と毒、紙一重の取り扱い注意の薬を二人は調合してしまい、レベルアップした。

兄に念のため持たせがどこかで役に立つ日が来るだろう…

きつと。

番外編 エヴァンナ王女の昔話（前書き）

エヴァンナ視点です。

10年くらい前のお話でエヴァンナが4〜5歳位です。
ランスロットは15、6歳です。

番外編 エヴァンナ王女の昔話

あたくしのお母様が亡くなりました。

お父様はお母様のお側を離れようとしません。

いつも仲の良かったお二人です。

あたくしはお父様が泣いているのを初めてみました。

お母様はそこにただ眠っているようにしか見えません。

あたくしはお母様を起こせばきっと目を覚まして下さるはずです。

「お母様、お母様、起きて下さい。お母様」

「エヴァ…、もうやめよう。母上は死んだんだ」

「死ぬとは？お母様はもうずっと目を覚まさないことなのですか？」

一番上の兄のアラジンはまだ幼い4歳の妹が母の死をまだ理解しきれない姿をみるのが辛い。

「お母様の手、とても冷たいですわ。あたくしが手を繋いでいれば

お母様は寒くないですわ」

お母様の手は氷のように冷たいです。あたくしが温めればお母様もきつと寒くないですわ。

「エヴァンナ、もうよい。リーナは天国にいったのだ。もうよい。」

お父様があたくしの手をお母様から離して言いました。

その後、お母様は目を覚ますことありませんでした。

あたくしはお母様にもう名前を呼んでもらうことも微笑みかけてもらうことも抱きしめてもらうこともないと知りました。

あたくしは、次期巫女姫としてお城を出て大神殿に暮らすようになりました。

巫女姫とは代々アディストリア公国の領土を魔法の防災で作り災害や日照りがないよう管理し、王に報告する役目を担う魔力の素質が高い女性が受け継いでいた。

巫女姫は王族の者もいれば民の中から選ばれるもの様々である。

巫女姫の年齢は10歳前後の歳から現巫女姫から魔法を学び、4年後に巫女姫の座を譲り受けるのが通例だった。

しかし、先代巫女姫は亡きリーナ王妃であつた為、急ぎよ母と同じく高い魔力と月の精霊の加護がある娘のエヴァンナが選ばれた。

エヴァンナは笑うことを忘れてしまった。

お母様が亡くなって半年が経ちます。

あたくしはお母様の後を次いで立派な巫女姫になります。

ときどきお母様を思い出して夜一人で泣いてしまいますが、お父様やお兄様たちがいますので寂しくありません。

＊ ＊

ハーバード家には変わった家訓がある。

『初めて見た裸体の異性を妻に持つこと』

女性に対しての敬意と尊重を重んじているのだが…

ランスロットは今、非常に困っていた。

「ランスロットさまあゝ。こちらを見てください」

大神殿の庭園の木陰の近くで従者の少年が同じ歳のメイドに襲われていた。

ランスロットは目を瞑り必死で相手の姿を見ないようにしていた。

その頃、エヴァンナは大神殿の庭園で花の冠を作っていた。

何か木陰からごそごそ声が聞こえてくる。

エヴァンナはこっそり近づいて覗いてみた。

そこには、従者の少年が押し倒されてメイドに襲われてる…。

あらあら、どうでしょう？

これは助けるべきでしょうか？

最近の女の方はとても積極的ですね。

お胸を堂々とさらして殿方の胸板に押し付けおりますわ。

殿方はぎゅっと目を瞑り必死で引き離そうとしておいですわ。

ああ、見事に食われるとはこのことですわね。

唇を奪われておりますわ。

「んー、んんー」
やめてください。

「ランスロットさまあ、何故こちらを見てくださらないの？」

ランスロットは今、非常に困っていた。

この状況をなんとかしたい一心だ。

初めて女性に言い寄られて、どうたらよいのか解らない。

しかし、ひとつだけ異性の裸体だけは見てはイケナイ。

どうしよう、幼い頃からの家訓が頭の中でリピートしている。

「そのくらいにしてあげたら如何でしょうか？」

「えっ！ひつ姫さま」

メイドがランスロットから離れて乱れた服を直した。

「お仕事はもう終わりました？」

「い、いえ。し、失礼致します。」

間の悪いことにこの国の王女にとんでもない場面を見られていたメイドはそそくさとその場を離れていった。

ここに残された従者の少年と幼い王女。

「もう、行ってしまわれましたわ。お取り込み中、お邪魔してしまいましたでしょうか。あたくし？」

「いえ、大変助かりました…」

ランスロットはいまだ放心状態だ。

…まあ、無理もないが。

気まずい空気が流れる。

……。

「あの、ありがとうございました。」

「いえ」

……。

「もう大丈夫ですよ」

小さな女の子に慰められた。

知らない内に体が震えてエヴァンナに頭を撫でてもらっていた。

エヴァンナは相手をそつと労るように微笑んでいた。

エヴァンナが微笑んだのはどのくらい久しぶりだろうか…。

＊＊

現在、エヴァンナの自室でエヴァンナとランスロットが二人でお茶を飲んでいた。

「エヴァンナ王女、今回のエタリーナ行の件なのですが…」

「ええ、辞退したいのですわね？」

「はい」

隣国エタリーナの目的地は大きな花街である。

二人は許婚同士だがそれは形だけであって二人の間に約束がある。

愛する人ができるまでの偽装の許婚でいること。

「ところで、最近勇者様のご兄妹のお部屋に花束を持って毎日お訪ねになっておいでとか？」

エヴァンナがふわりと微笑んで言う。

「ええっと、あの…はい」

戸惑うランスロット。

「私に気を使う必要は一切ございませんわ。好きなお方ができたのですね？」

「まだ、自分でも解りませんが、そうなのかもしれません」

「シズカ様ですか？」

「えっ」

… 凶星のようだ。

「シズカ様のお好きになったごきっかけは？」

気になるエヴァンナ、アディストリアのジュリエット・シャーロツク
のファン1号にしてファン倶楽部の会長としては気になる。

今後の活動計画に支障をきたしては！

「美しい黒髪やお姿もそうですがお優しい所と歌声でしょうか？」

「歌声？」

ランスロットはあの日の出来事をエヴァンナに話した。

「……」

「あの、エヴァンナ王女？」

あの日は確か雫がお家に帰りたいと大神殿にきて召喚した時に、使った鏡に体当たりしようとして止めましたわね。

推察するとシズカ様はその頃、猛進突破の活動中…。

シズカ様ではありませんわね。

「ランスロット様、シズカ様は今のうちに諦めるべきですわ。あの方はいずれ元の世界へお帰りになりますわ」

「それは、わかっております」

「急にとは、いいませんがシズカ様とシズクには距離を置くべきです」

「…ええ、そのつもりです」

「そのお言葉聞いて、私、安心致しましたわ」

ランスロット様、お二人のことは諦めて頂きますが、シズヤ様との「かぶりんぐ」には協力致しますわ。うふふ。

間違いなく腐王女に落ちていくエヴァンナであった。

勇者の旅立つ日まで

「くっ…やあ！」

カキンッ。

鉄と鉄がぶつかり合う音が響く。

「もう少し刀の流れを汲み取るように」

ランスロットが言う。

「はい！」

再び剣を交える二人。

異世界にやって来てあっという間に20日が過ぎていた。

ここ5日ばかり勇者の剣を用いて騎士達の中に混じって実戦的な訓練をしていた。

「痛ってえ……」

「ちょっと、ガマンしてよ。お兄ちゃん」

「お兄ちゃんの手にまめ出来てるね」

手に出来たまめが潰れて、妹の静華に手当てしてもらっている兄の静也とその様子を見ている末っ子の雫。

「お兄ちゃん、結構十手とかすぐ落したりしてない？」

「……………」

凶星のようだ。

「お兄ちゃんにこれ、プレゼント」

末っ子の雫がそう言って、静也の前にポケット中からあるものを取り出した。

ぶらーん。

ぶらーん。

紐ですよね？

細い丈夫な紐みたいですが雫さん…。

「この紐は？」

静也は末っ子の雫に聞く。

「てぬきお手貫尾だよ。お兄ちゃん、十手かして」

末っ子の雫はそういつと静也から十手を借りて何やら紐を十手の柄にしっかり結んだ。

そのまま雫は紐を手に通して十手を持つ。

「お兄ちゃん、ちょっと立って」

「あっ、うん？」

言われるまま、立ち上がる静也。

「いくよ」

「えっ、な」

バシッ。

「

£?
?
!」

あまりの痛さに声にならない悲鳴をあげる静也。

兄である静也の尻を十手で叩く末っ子の雫。

何かのお仕置きみたいにみえると思ってしまう静華。

兄はプレゼントとは尻を叩かれることなのか？
おにーちゃん、何か悪いことでもしましたか？
11歳の時に一緒に寝ておにーちゃんが火事の夢を見て雫さんのお
布団を洪水にしまったことをまだ根にもって足りとか…。

痛さのショックのあまりぐるぐると混乱している静也。

「これ、つけると短くても長い刀と同じくらいの打撃の威力が増すの。

あと手から離しても簡単に落とす心配しなくてもいいんだよ!」

雫の話に上の兄妹は納得した…。

身を持つて体験させられたんだと。

ただ喋るより実際に叩かれると現実味が違ってくる。

だが、雫は手加減なく子供の力でも十分に威力を発揮していることを教えてくれた。

しかし、静也の尻は猿のようになってしまったため、また薬を塗るはめになってしまった。

＊ ＊

次の日の朝。

王族三兄妹と鈴木三兄妹、第一騎士団長のランスロットが勇者一行の旅立ちに立ち会った。

「あの、妹達のことくれぐれもよろしくお願いします」

勇者である静也は旅立たなければならない。

「ご安心して下さい。シズカ様とシズクのごことは御守り致しますわ。
(悪い虫が付かないよう)」

エヴァンナが言う。

「お兄ちゃん、これ薬とお金」

静華が袋を渡した。

「ありがとう」

静也は袋を確認した。あのB・Lマンガ本の印税のお金と薬がいくつが入っていた。

「お兄ちゃん、チョコーク半分こ！」

何かあったら書いて、絶対会いに行くから！」

雫は白いチョコークをぱきんと折って静也に渡した。

「ああ、元気でな！いつてくる」

静也はそついい、黒馬に乗ってルイズラム宰相とキール副団長を率いて旅立った。

その日はいい天気で太陽がきらきらと輝いていた。

勇者の旅立つ日まで（後書き）

これでお城の生活編が終わり、勇者が旅立ちました。

魔守の森 名無しの龍 1 (前書き)

新章突入です。

魔守の森 名無しの龍 1

勇者が旅立ってから1週間が過ぎていた。

今日は静華と雫とおまけに護衛のランスロット騎士団長が公式に孤児院の訪問に馬車に乗って移動していた。

「お姉ちゃん、今日行く孤児院は近くに大きな森があるんだってね」

「うん、なんでも国の天然保護国立指定地域に指定された『魔守まもりの森』ていうんだよ」

「いつてみることも出来るかな？」

「いけません、シズク。そこは魔族がいてあなた一人では危険ですし、何より一度入った人間は二度と出れないと云われている位に別名『迷宮の森』とも云われているので気を付けて下さいね」

「はい」

三人がそんな会話がされていた。

＊ ＊

鬱蒼と生い茂る木々の中で一匹の魔族がいた。

その魔族には産まれた時から名前が無く『名無しの龍』と呼ばれ、産まれた山を降りてからは皆から蔑まれ孤独だった。

《ナゼ、ワタシニハ ナマエガ ナイノ？》

その魔族はいつもその答えを探して『魔守の森』へ来ていた。

＊ ＊

孤児院に着いた静華達。

子供達の様子を見ることや一緒に遊んだりしていた。

静華はその時丁度、孤児院で一番幼い赤ちゃんをあやしていた。

静華は意外と子守が得意だった。

腕の中にいる赤ん坊を上手にあやしている。

すると、栗が近くにやって来た。

「お姉ちゃん、赤ちゃんあやすの上手だね」

「うん、栗の小さい時よくお兄ちゃんとで栗の子守してたからね」

「へえ、そうなんだ」

「栗がよく夜泣きして泣いてた時はやっぱりお母さんの子守唄で泣き止んでたけど」

「サイレントナイトだよね？」

「うん、12月25日は雫のお誕生日だからね」

「クリスマスと誕生日が一緒なのはちょっと損した気分だけど……」

「まあ、いいじゃない。それよりこの子にも歌ってあげたら？
この間、合唱部でソロで歌って市の大会優勝したんでしょ。
お姉ちゃんにも聴かせて？」

「えっと、サイレントナイトでいい？」

「ええっ」

雫は歌いだした。

――、~~~~~

その歌声は優しく柔らかいがしっかりと辺りまで響き空気に溶け込んでいった。

ランスロットは別の部屋にいて子供達と遊んでいた。

聖女殿の歌声が聴こえる。

ランスロットはその歌声に惹かれるよう静華と雫のいる部屋へと足を運んだ。

すると、ふっとまたしても歌が終わってしまったようだ。

しかし、ランスロットは赤子を抱いて、優しく微笑む静華の姿を見付けて確認した。

聖女殿の歌をもう一度、聴くことが出来た。

ランスロットは嬉しげに優しく赤子を抱く静華の姿をそっと見つめていた。

歌を歌っていた瞬間。

《ナゼ、ワタシニハ ナマエガ ナイノ?》

微かに聞こえた、問いかけの声。

「お姉ちゃん、ちょっと散歩いってくるね」

「あつ、雫。気を付けてね」

初めてこの世界に来た時と同じ、頭の中に届く声。

教えてあげなくちゃ！

雫は知らず知らずの内に『魔守^{まもり}の森』へと足を運んでいった…。

別名 迷宮の森へとも。

魔守の森 名無しの龍 1（後書き）

先王の遺産でもう察していた方も多いと思いますが声を聞くができたのは幸でした。

魔守の森 名無しの龍 2 (前書き)

本日、累計PV 10,000 アクセス突破！

ありがとうございます。

魔守の森 名無しの龍 2

歩く？姿はぷに、ぷに。

立ち姿はぷるん、ぷるん。

鳴き声？はぴよ、ぴよ。

濡れた瞳は黒く潤んで見た目はぷるぷるのつるつるの黒いスライムちゃん。

雫は生まれて初めて魔族？と遭遇していた。

一人で森に入っていた雫は、白いチョークで木に矢印を書きながら進んでいた。

そこで出会ったのがブラックスライムだったのだ。

ぴよっ、ぴよ。

《うわーん。人間こわいよ》

《あたし、えーと怖くないよ。お友達になろう》

ぴよっ？

《ともだち？》

《うん、友達に！あたしは雲っていうの。あなたは名前なんていうの？》

ぴっ、ぴよよ、ぴよう

《しずくね！あたちのなまえは…ないの》

《えーと、スライムだからスー。スーちゃんはどうかかな？》

ぴよ、ぴよぴよ、ぴっ。

《あたちの名前スー。ありがとう！しずく》

こうして、雲はこの世界に来て初めて友達をGetした。

＊＊

一方、孤児院では未だ帰らない妹の雫を姉の静香は心配していた。

雫が散歩に行くといって既に3時間が経過していた。

さすがにもう戻って来てもいいはずの時間だ。

もう、日が沈み始めていた。

「さすがにもう戻って来てもいいはずですね。ランスロット様？」

「ええ、少し辺りを探して見ましょう」

「はい」

……。

しばらく辺りを探す二人。

「ランスロット様、これ見て下さい」

静華が見つけたのは木の幹に白い矢印が描かれたものだ。

「もしかしたら…、雫は魔守の森に」

心配した表情で静華が言う。

「それでしたら、大変なことです。魔守の森は魔族達の数少ない住みかであり、そして時間の流れがここと違うのです」

「探さなくちゃ！」

「お待ち下さい。聖女殿」

今にも森へ入ろうとする静華をランスロットは肩を手に置き止める。

「いけません、お待ち下さい。」

「なんで！大事な妹が迷子になったのよ。帰って来ないのよ」

静華は息を荒げて言う。

ランスロットは大人しいと思っていた静華の荒々しい状態を見て少し驚いたが、

「シズクは私が必ず見付けて帰りますから、あなたはこの事を他の護衛の者に知らせて、城へ伝えるようお願いします」

「…解りました、あのっランスロット様にこれを薬です」

「ありがとうございます。では、行って参ります」

ランスロットは森の中へ入った。

静華はランスロットの姿を見送ると他の護衛の兵士に伝えて自分は孤児院で二人の帰りを待つことにした。

＊＊

ぴい、ぴよっ。

《はっけよゝい、のこった》

かぱっ、かっぱ

《せーの、かった》

《うー、カップ君つよいよ。3回勝負で3回とも負けちゃった》

雫は現在、カッパと相撲をとって遊んでいた。

何故こんなことになっていたかというと、森の中でスーちゃんとぴよぴよと話していたら、子供のカッパが倒れていた。
子供のカッパはお皿が乾いていて飢え死にしそうだったのを川まで運び助けて仲良くなったのだ。

《あゝあ、少し汚れちゃったね》

かぱ！

《いいところ知ってる》

《どこ？》

ぴよぴよ。

《あたちもいけるかな》

かば、かば。

《おいで、こっちだよ》

3人はこうして、カップ君の案内で移動していた。

（シズクはどこまでいったのだろうか？）

ランスロットは一人で雫の行方を探していた。

木の幹にしっかりと描かれた白い矢印を頼りに進んでいる。

おかげでこちらも助かるし、シズクは見た目よりずっと賢い子だと

ランスロットは思った。

途中で川まで来て白い矢印通りに進んで行く。

すると、白い湯気が見えてきた。

硫黄の匂いがする。

木々をわけ進み、白い湯気が立ち込める水場で探していた人物を見つけてしまった。

温泉に浸かっている雫とぶかぶか浮かんでいるスーちゃんとはしゃばしゃ泳いでいるカップ君を。

魔守の森 名無しの龍 3

ランスロットはぼーっとその光景を見ていた。

魔族はランスロットもはじめて見たがこんなに愛らしいというか…逆に毒気を抜かれる。

ランスロットの中での魔族に対するイメージがまたしても崩れてしまった。

すると、雫は見知った人を見つけて声をかけた。

「ランスロット様、こんにちは」

「こんにちは…くろ？」

「……………？」

雫は自分の頭に手を置いてみた。

あつ、かつら落としたみたい。

雫は兄と姉と同じ黒髪を隠していた。

理由は色んな意味で目立つのと兄と姉が熱心に隠しなさいと勧められ焦げ茶色の地味なかつらと分厚い眼鏡で素顔を隠していた。

ランスロットは呆然と雫を見つけている。

雫はなんでだろう？

と気になり、湯から立ち上がりランスロットに近づくと、

「…シズク」

「はい？」

ランスロットは雫の名前を呼ぶと自分の身に付けていたマントを雫の体に巻いて、

腕の中にぎゅっと抱きしめ、そつと雫の耳元にささやいた…

「私の妻になって下さい」と。

雫は抱き締められたまま、頭が真っ白になっていた。

いきなり、つま？

つまって？

つまらない？

つまようじ？

完全に混乱している。

とりあえず、落ち着けあたし。

「ランスロット様、いきなりどうなさったのですか？妻になって下さいとは？」

「あの…、えっと、なにから話せばよいのか」

ランスロットは雫の問いにしどろもどろになりながら、ハーバード家に代々伝わる家訓を雫に話した。

「ランスロット様、大丈夫です。今回は事故だし、それにあたしのことランスロット様は、女の子だけ意識してないですよね」

「女の子だけ意識してない？」

「はい！ランスロット様の家訓の『初めて見た裸体の異性を妻に持つこと』で異性として意識していない女の子にあたしはなりませんか？」

こういうのは主観の問題でランスロット様からみて考えれば今回のお約束な展開の故意で見た事故は家訓にのっとるに値しますか？」

「…さすがに問題がありか…とは」

「ですよね」

さすがに成人していない未婚の女性といってもランスロットの中では寧ろ小学一年生位に思われている…。

悲しいことだが今はその勘違いである意味助かっている。

恐るべし日本人のフェイスマジックだ。

「これは故意に起こってしまった事故です」

「はい、それじゃ！」

「ええ、今回は二人だけの秘密にしましょう」

「良かった」

二人揃って安堵する。

しかし、栗の心の中では乙女として複雑だった。

カッパ君とは温泉で分かれる事になった。

かば。

《さよなら》

《さようならー》

ぴっよ！

《まったね！》

……。

「シズクは…解るのですか？」

「…なにがですか？」

「あの子達がしゃべっているのをです」

「普通に解りますけど?」

雫はスライムのスーちゃんを抱き上げてランスロットの前に差し出した。

スーちゃんの触り心地はつるつるのすべすべで赤ちゃんみたいな肌でぷにぷにしていた。重さもなく軽くて簡単に風に飛ばされそうだ。

《スーちゃん、ランスロット様です》

ぴい、ぴよ。

《こんにちは、らんすろつと。あたちスー》

「なんと、しゃべっているのですか?」

「こんにちは、らんすろつと。あたちスーですと言ってます」

「よろしく願います。スー殿」

ぴよぴよ、ぴ。

《うれしいでち、よろしく》

どうやら、スーちゃんにはこちらへ言葉が判るようだ。

それから、カップ君と別れた二人と一匹は天気が悪くなって来たので今日は近くの森の洞穴を見つけて一晩泊まることになった。

その日の夕食にはカップ君からもらったキュウリに森の中で見つけた甘酸っぱい赤い木苺とシイタケ似たキノコだ。

キュウリは歯で噛むとカリッと音を立てて口の中でみずみずしく新鮮で美味しいキュウリの味を味わった。

木苺の赤い実を口へ運ぶと甘酸っぱさが広がり一度味わうと病み付きになる。

最後のシイタケに似たキノコは念のため火を通したが二人とも一口

だけ食べて止めた…。

二人が一口だけ食べたのは種類が本当にシイタケか解らないからだ
った。

この世界のキノコには『むらむら抱け』というシイタケに良く似た
キノコがあり、かつて姉の静華がエヴァンナと共同開発してしまっ
たむらむらの薬の原材料があるのだ。

二人のあまり思い出したいくないものであり（一人は完全に記憶を操
作されているが）、因縁あるもので一口だけ食べて様子を見ること
にしたのだ。

すると、雫が顔を真っ赤にさせて熱を出し始めた。

そう、子供が『むらむら抱け』を食べると熱を出す。

一口だけ食べてしまったが熱は一時的でしばらくすれば治まるが雫
が呼吸をあらげて苦しそうだ。

ランスロットは森の中へ入る前に静華から貰った薬袋を探してみた。

小さな小瓶に熱冷ましと書いた飲み薬を見つけた。

しかし、薬をなかなか飲めずにいる雫。

ランスロットは仕方なく薬を口に含み、雫の小さな唇に自分の唇を重ねて薬を飲ませた。

少女の唇は柔らかく暖かい、初めて女性に口付けされた時は恐怖しか感じなかったが…。

思えば騎士達の会話で恋人との口付けが甘いといっていて、よく解っていなかったが、いまなら少し解る気がした。甘いとはこういうことなのだろう。

もし、愛しい人と口付けが出来るならどんなに甘いだろうかとランスロットは雫に良く似た少女のことを想った。

魔守の森 名無しの龍 3 (後書き)

ランスロットは間違いなくロリコンだと思う人

はい、

手を挙げる作者…。

魔守の森 名無しの龍 4

「ん」

ドクンドクンとしっかりした心臓の鼓動を聞きながら雫は目を覚ました。

なんだろう？

雫は目を開くとランスロットの腕枕で自分が寝ていることに気付いた。

ふみゃあー！

あたし昨日どうしちゃったの？

キノコ食べて…！

雫は両手で自分が服を着ていることに安堵する。

良かった。変なことしてない。

雫は昨日の晩からの記憶がないだけに少し不安に感じていたが杞憂

のようだった。

しかし、今自分が置かれている状態には問題がある。

なんで、あたしランスロット様に腕枕されて抱き締められてるの？

雫の今の状態は、ランスロットの右腕に雫の頭を乗せ、右手は雫の細い腰に回されている。

これが中高生位の女子なら甘い雰囲気またはドキドキする展開になるが小学生が相手だところはない。

ランスロットも目を覚ました。

「…………おはよう。シズカ」

と寝惚けて人の名前を間違えるランスロットはそのまま雫の額に手をおいて前髪を掻きあげ、額に唇を落とした。

さすがの雫もこれにはぜんぜんときめなかった…。

「おい、ランスロット様。寝ぼけてないで起きて下さい」

ランスロットの耳元で大きな声で言う雫。

「…すみません」

どうやら、はっきり目が覚めたようだ。

「おはようございます。お姉ちゃんではなくてすみませんが」

雫はにっこり笑顔で挨拶する。少し怒りの色を含んでいる。

「…おはようございます」

ランスロットの方は苦虫を噛んだ表情をして、雫の腰に回されていた手を離した。

朝の食事を終えた二人と一匹。

「ランスロット様はお姉ちゃんのこと、どう思いますか」

いきなり直球玉を投げる雫。

「…!？」

顔を真っ赤にさせるランスロット。

「言わなくていいです…。もう解りましたから」

ランスロットの一目瞭然の反応を見てしまった雫。

昨日は妻になって下さいとか言ってきたのはどのどいつだ!と思
いながらも、姉を好きだという少年のような反応した目の前の大人
に同情した…。

あの姉でいいのですか?
と思いつつ…。

移動の準備を終えると、ランスロットは雫にある質問した。

「何故、シズクはこの森に入ってきたのどうしてなのですか？」

「伝えるためにきました」

「何を？」

「お母さん魔王が伝えたかった卵の中にいた子供の名前です」

「それは本当に……」

「たぶん、あの時はこちらにきたばかりで微かにしか聴こえなくて魔王の口の中に頭を突っ込んで見ましたが……」

「……………そうですか。」

ちなみに魔王はその卵の子になんと名付けようとしていたんですか

「？」

「××××」

「…魔族語のようですね。私には解りません」

ぴよぴよ。

《のあーる。いい名前。あたち、ななしのどらごん、しってる》

《知ってるの？スーちゃんどこにいるの》

ぴよ。

《うれしいのみずうみにいるの》

「ところで二人でなにを話しているのですか？」

栗とスーちゃんの会話にランスロットが参加。

「はい、スーちゃんがその魔王の子供を知ってるそうです」

「それでは、探さない訳にはいきませんね。早速探しに行きましょう」

「はい」

ぴよ、ぴよ。

《あんない、するでち》

スーちゃんの思わぬ魔王の子の情報を得た二人は、スーちゃんの案内によってその名無しの龍ドラゴンに会うことにした。

＊＊

移動していた雲とランスロットとスーちゃん。

「ランスロット様、お姉ちゃんのことなんですけど…」

立ち止まるランスロット。

「お姉ちゃん、男嫌いなので（本当はある意味では無類の男好きだけど）、これからはお互い好敵手ライバルになりますね（あなたの為でもあります！）」

「解りました。こういうことですね。これからは可愛いあなたとシズ力殿を取り合うのですね」

余裕たつぷりの笑顔でランスロットは言う。

「お姉ちゃんの名前で呼ぶの禁止です！聖女殿とお呼びなさい」

「はい、はい」

隣で話を聞いていたスーちゃんは、

《ふたり、いちゃいちゃして、ぷー。》

変な誤解されてますよ、ご両人。

魔守の森 名無しの龍 5

雫とランスロットはスーちゃんの案内で『^{うれ}憂いの湖^{みずうみ}』にやってきた。

^{ドラゴン}龍がいた銀色の鱗に太陽の光が当たってきらきら輝いていたが傷だらけだった。

身体のおちこちが刃物で傷つけられて、まだ日が浅いのだろうか翼の根に近い背中の怪我が痛々しかった…。

傷ついた龍は瞼を閉じていたが二人と一匹の気配に気付いていた。

《何しに來た、人間》

《あなたが魔王の子供ですか？》

ぴよ、ぴよぴよ。

《こんにちは、あたちスー。しずくに名前もらったの、よろしく》

龍は人間の子供がスライムと一緒に魔族語を話しているのに驚いた

ようだ。

《人間、私がそうだとしたらどうする》

《あなたのお母さんが魔王なら、あたしはあなたに名前を伝えなきゃいけない》

龍は黄金の瞳を大きく見開いた。

故郷の山を追われてからは周りの魔族からは名無しの龍と蔑まれ、人間達からは怖がられて命すら狙われた。

今まで人間と言葉を交わしたのが初めてであり、ずっと探し問いかけてきた答えをこの小さな人間が知っている。

だが、信じられる訳がない。

雫は龍に近付き傷跡が残り鱗が剥がれている所にそっと触れた、龍はヒヤッとしていて冷く硬い感触がした。

《人間、何をしている？》

龍は小さな人間に傷跡を触れられて困惑した…。

この小さな人間は何者なのだろう。

《ノアールは今までこんなに傷付いて、痛い思いしてきたんだね》

雫は手に触っている傷の深さに心がえぐられるように痛む。

《…何故、目から水がでるのだ？》

雫は龍に言われて自分が今、泣いていることに気付いた。

「大丈夫ですか、シズク？」

心配したランスロットが雫に言う。

「…わ、からな…いです」

「はい」

ランスロットは雫を見守るようにきく。

「龍の傷を癒してあげたいのでしょうか。これを使いましょう。あなたの姉上が作った傷薬です」

ランスロットは雫を追いかける前に雫の姉の静華からもらった薬袋を開き『傷薬』と書かれた塗り薬を雫の前に差し出した。

「…ランス、ロット様」

雫はランスロットの手から傷薬を受け取った。

《ノアール、怪我の手当てさせてもらえる》

《…勝手にしろ、人間》

《ありがとう》

雫は泣き止んで小さく微笑んだ。

雫は龍の背中に塗り薬を塗った。

龍は今までに感じたことのない感情にどうしたらいいのが困惑していた。

今まで傷を癒そうとしたものがいただろうか。私を『ノアール』と呼び、小さな手で私に触れて目から水を流す不思議な人間。

小さな人間に触れられるあたたかい温もりに龍の心は暖かい気持ちになっていた。

この気持ちがあん心するという言葉なのだか、この龍は故郷を離れて以来、初めての経験だった。

《ノアール、もう大丈夫。あたし達と一緒にいこう》

雫は龍の顔に近付いてそつと抱き締めた。

《ええ、行く》

龍は知らない内に見えなくなり、銀色の輝く髪に黄金の瞳の17、8歳位の美少女が雫に抱き締められていた。

雫はびっくりしたが美少女のお姉さんが雫をぎゅっと抱き返した。

《もう一度、私の名前を呼んで》

《…ノアール》

雫はそのお姉さんの声が先ほど龍と同じ少し低めの心地よい声で同一人物だとわかった。

私の名前は、ノアール。

母上が名付けたかった私の名前。

でも、それよりもずっと大事な

人間の子が名前を呼んで一緒に行こうといってくれた。

もう、一人じゃない。

それだけで私は幸せだ。

《ノアール、涙が…》

ノアールは顔が濡れているのに気が付いた。

《私も、目から水が…》

すると、

ふに、ふに、ふにふに。

スーちゃんがノアールに近付いて顔をぺろぺろ舐めた。

びよ。

《しょっぱいでし》

スーちゃんはノアールの膝に座った。

《それは、涙だよ》

雫はノアールを見ていった。

《…涙？》

《うん、うれしい時や悲しい時に、涙が出るの》

《そうか》

ノアールは雫を見て二人は一緒に笑った。

＊＊

魔守の森を出た三人と一匹。

孤児院から黒髪の少女が目の下に見事なくまをつくって駆け寄ってきた。

「雫ー！！」

「お姉ちゃん！」

「雫のバカバカ！
1週間も帰って来ないで、すっごく心配したんだから」

「…い、1週間…もごめんなさい」

素直に謝る雫。

「でも、無事良かった」

静華は雫を思いつ切り抱き締めて頭を撫でた。

「お姉ちゃん、くっするしいよ」

「あ、ごめん！」

静華は腕の中にいる妹を愛しそうに見つめていたがあるものに気がつく。

「雫、あの黒いスライムと銀髪的美少女は？」

「うん、友達だよ」

「そっか」

静華はそういうとするすると力を無くす様に雫に倒れこんだ。

「お、お姉ちゃん」

妹の無事を確認した静華はここ数日、眠れてなく妹の帰りに安堵して眠ってしまったようだ。

「シズカ様をお運びますが」

ランスロットの問いかけ雫は、

「結構で……おね、がいします」

雫はしゃーと逆毛を立てた猫のようにランスロットを警戒したが、自分では姉を運べない…。

姉に触れて欲しくないと思いながらも仕方なく、今回はランスロットに頼んだ。

その後、姉は3日間こんこんと眠り続けた。

後日、城に着いた聖女一行のニュースでブラックスライムが一匹いたことで城中、大騒ぎとなったが、

愛らしい容貌とびよびよと鳴く可愛い声にくりつとした濡れた黒真珠のようにきらきらした瞳を見てしまった人々を虜にするスーちゃん。

ある意味、魔族だ。

スーちゃんの城での人気を聞きつけた新聞社がやってきてスーちゃんのことを紹介したいといってきた。

「是非、我が『週間新聞アディストリア』にスー殿のことを記事に

したいのですか？」

新聞記者がアラジン国王陛下に謁見していた。

「陛下、私にその記事に描かせて下さい」

そつと、様子を見にきていた聖女が名乗り挙げた。

「その、私が記事を……」

何だか言いにくい新聞記者。

「良かるう」

王が一言で許可した。

「ありがとうございます、陛下」

静華はにっこり笑顔で応えた。

こうして、聖女の静華は週間新聞で魔族のスーちゃんを記事に書くことになった。

新聞が発刊され、聖女が書いた話題性たっぷりの記事を読もうとしていた国民に驚愕^{きょうがく}が押し寄せた。

作者 シズカ・スズキ

1コマ目 ぶるぶる震えているスーちゃん。

2コマ目 ぶにぶに飛んでいる？（注 歩いてる）スーちゃん。

3コマ目 ぴよぴよ鳴いているスーちゃん。

4コマ目 瞳がうるうるしているスーちゃん。

なんじゃ、こりゃあー！ー！ー！

4コマ漫画です。

スーちゃんの魅力を充分かつ無駄なく引き出しているぞ！

これは新聞には必ずなくてはならないものだ。

それがこの世界の新聞には一つもないのだ。

静華の予想は当たり前！

『週間新聞アディストリア』は静華の描く4コマ漫画を目的に新聞を買う人が増えて新聞社は黒字となった。

そして、スーちゃんを題にしているせいか、国内の魔族に対する風当たりや偏見が国内ではかなり薄れていった。

＊＊

「シズク、ここにいたのですわね」

「ノアがあなたを探していましたよ」

「エヴァ先生…」

《ノアール》は魔族語で皆が発音出来ないために『ノア』と近い名で呼んでいた。

ノアールは最初、雫とスーちゃんだけしか心を開かなかったが雫の姉の静華とは親しくなっていた。

「エヴァ先生、どうしてあたしだけ魔族語が話せるのでしょうか？」

「そうですね、シズク、この水晶にまたあなたを見てみましょう」
雫はエヴァンナに言われてもう一度、属性見て職業の所に新しく追加されているものがあつた。

職業 児童小学5年

体育会系魔族言語術魔女っ子

あたしはアッコちゃんの…

いや、変人する。

変換間違えた…

変身はしない。

サリーちゃんのだろうと雫は頭の中で考えた。

「シズク、これから先はどうしたいと思いますか？」

「あたしは魔族に優しい世界にしたいです」

雫はずっと考えてた気持ちをエヴァンナに話した。

「シズク、それではこれから魔法を学ぶための学園に入ってみませんか？」

「はい！」

雫は迷わず返事をした。

あたしはこの世界のことをもっと知りたい。

《ノアール》や他の魔族達の役に立ちたいそう思った雫だった。

そして、雫はその翌日から『マラウィ魔法学園』に入学したのだった。

花街の悪夢（前書き）

新章です。

花街の悪夢

勇者一行がアディストリア公国の隣国エタリーナに入国し、目的地に着いたのは旅に出てから10日目のことだった。

エタリーナは先代の国王陛下のリーナ王妃の故郷ではあるが、今回の旅は極秘でなので目立たずスムーズに旅することが出来た。

アディストリア公国は大陸の中では比較的中規模位の大きさで領土は広く北は世界一高い『水晶の山』があり、南が海が広がる。西は砂漠が広がり東に隣国のエタリーナがあった。

勇者の静也達は最初の3日は町から町へと馬に乗りながら夜は宿に泊まっていたが国の国境が近くなるに連れて町が村へと替わり二晩は村の村長の家を訪ねては一晩泊まれるか聴いては快く泊めてくれた。

その後は大きな森を避けるため何もない荒野で初の野宿を勇者はしたのだが、特に問題はなかった。

エタリーナへの入国審査は実に簡単だった。

ルイズラム宰相が予め用意していた証明書を見せてあっさり国の中に入る事が出来た。

そして、静也達は目的地『フラワータウン花街』を目指していった。

＊＊

フラワータウン
花街は花があちらこちらに植えられて花の香りが街中に広がっていた。

この世界の今の季節は初夏に入ったばかりで青く紫がかったエキザカムの花もちらほら咲き始めていた。

「ここで魔族の子が売られて捕まったのは本当なんですか？」勇者の静也は尋ねる。

「その筈です。密売業者の秘密網から得た情報ですが…」

宰相のキールは答えて、それを聞いた静也は、

「み、密売……」

静也は妹達を置いて自分だけがここに来たのが何となくわかった。

しかし、密売とはここはそんなに治安が悪いのだろうか…。

「ここ、そんな密売とかやってそうにはミエナイでしょう」

「あつ、はい」

「ここはネ、昼と夜ではかなり印象が違っわよ」

「そうなんですか、キールさん」

ここ10日で二人と親しくなった静也だったが、意外なことに宰相の
名前がルイズラム・ジ・ヤイアンですでに既婚者だったり、副団
長はキール・ミナモトと日本人の名字に近かったりとドラ もん的
に縁があるのは気のせいだろうか…。

「今は昼を過ぎたばかりだが、夜の方が色々と情報が得られそうな

ので先にしばらく泊まれる宿を探しましょう」

「そうですね」

「じゃあ、アタシがおおっておき」

「「普通の宿を探しましょう」」

キールがしゃべっているのを遮り静也とルイズラムの声が重なる。

キールはどんな宿に泊まるつもりだったのだろうか……。

花街の悪夢（後書き）

答え、超ファンシーなふわふわのもふもふしたぬいぐるみがたくさんある少女趣味のある意味ピンクな宿です。

花街の悪夢 2

時刻は夕方。

辺りは暗くなり始めて周りの建物に明かりが灯る。

昼は太陽の光が街を照らし花の香りが広がる緑豊かな街だったが、夜になるとまた違った情景になっていた。

現在、勇者一行は花街の街広場フラワータウンにいた。

広場には噴水や花時計があり時計の針は夕方6時近くを指していた、季節柄まだ日が沈みきっていない。

この世界には月が13ヶ月あり、1月が28日で構成されている。

地球の一年間とほぼ近い日数だ。

勇者一行は広場で情報を獲ようと変装して着たわけだが、

よりもよって、

何で俺が娼婦をやんなきゃなんねーんだよっ！！

あと、キールさんも。

俺が…娼婦だなんて、

さ、最悪だ。

しかも今着ている服にも問題が…。

何故、和服？

全体が空色の生地^{もえぎ}に柄は上から下の裾にかけて舞い散る薄紅の桜が
広がり、帯は萌色だ。

薄化粧をキールにしてもらい、髪は黒のお下げのカツラを被った。

もう一人のキールに至っては見事に娼婦に化けている…。

紅いドレスに胸元はあいてないが、背中が大きくあいている。

スカートは長いが太ももから大きくスリットが入って、そこから覗く黒いストッキングを履きチラリと見えるガーターベルトが艶かしい。

化粧も上手く、元々妖艶なキールだったがそれに拍車がかかったようだ。

紫がった金の長い髪は腰までかかり、今まで簪で髪をアップに纏めていたので、髪を下ろした姿は新鮮でどう見ても女にしか見えない。

肝心の女性を表す部分にはパッドを詰めて誤魔化した。

静也は宣言する、俺は今まで女性の下着を着たことなどない。

今回の襦袢を除いては、

結局、身に付けているではないか…。

＊ ＊

「こんばんは、お嬢ちゃん。今夜はわしと一緒に食事でもどうかね？」

60代位の初老の男が声をかけてきた。

「…えっ、あ、あの…」

「お嬢ちゃん、もしかして初めてなのかい？」

こくりと首を縦に頷く黒髪のお下げの少女がそのまま顔を下に伏せる。

「そうか、じゃあ今夜は食事だけでも、すぐそこの店でもどうだい

？」

初老の男はそう言い、女装した勇者の静也はまた、頷いて後を着いていった。

店の中はこじんまりとした上品でゆったりとした酒場だった。

初老の男は女装した静也を席に座らせると向かいの席に座り、注文表を静也の前に差し出した。

「さあ、好きな物を選びなさい」

「…お、水で」

ウラ声でやつと喋る静也に対して初老の男はニヤリッ（ー）と気持ち悪く笑ってきた。

静也は鳥肌を立てたのは言うまでもない。

「初めてで緊張しているんだね。わしが代わり注文を頼もう」

そう言つて初老の男はミートスパゲッティを2つ頼んだ。

「さて、お嬢ちゃんはどこから来たんだい」

「お、わつ私は遠くからです」

男の問いかけに答える静也。

チリン、チリン。

店の中に客が来たことを知らせるベルが鳴り響く。

赤毛の男と紫がかった金の長い髪の女。

静也がよく知る知人が店に入ってきたのだった。

花街の悪夢 3

店の中に自分の良く知った二人がいる。

静也は今までの緊張が溶けるように警戒心も緩んでいた。

注文したミートスパゲッティがきた。

「お嬢ちゃん、さあ、遠慮せずこのチーズかけてをお食べ」

初老の男は粉チーズを静也のスパゲッティの皿にかけた。

男はまた気色悪い笑顔でまたニヤリ（ー）として、「さあ」と静也に食事を勧めてくる。

静也は仕方なくスパゲッティを食べる…。

スパゲッティにチーズの味はしなないが変な味もしない。そのまま飲み込み、男を見る。

「食べたね…」

男はニタリと笑い、静也は身の危険を感じて席を放れようとした。

が、

体が痺れて動けず、眠くなってきた。

「お嬢ちゃん、さっきのチーズ粉は即効性の強い痺れ薬と睡眠薬だよ」

男はまたニタリと笑って静也は意識をなくした。

＊＊

ちゅん、ちゅん。

雀の鳴き声で静也は目を覚ました。

古いかび臭い匂いがするベッドに静也は両手に手錠を掛けられて寝

かされていた。

和服はそのままで乱れていない…

良かった。

静也はひとまず他に何もされていないことに安堵してほっと息を付いた。

しかし、昨夜はスパゲッティを食べてすぐに体が痺れて眠ってしまったとは、

………凄く情けない。

妹達が居なくて本当にある意味良かった。

俺の新たな黒歴史が妹達に知られなくて…。

静也がとりとめなくそんな考えをしていると、昨夜の初老の男が静也の様子を見に来ていた。

「お目覚めはどうだい？
お嬢ちゃん」

「…何のために、おつ私を監禁したんですか？」

静也は女の子と思っっている男に対して質問を投げ掛ける。

「もちろん、売るためだよ、お嬢ちゃん。珍しい黒髪に黒目だ！
お嬢ちゃんはきっと高値が付くだろう」

男はまたニタリと笑って静也に言った。

「お嬢ちゃんが売り出されるのは今晚だ。せいぜい、良い金持ちに買われるといいな」

男は静也にそう告げて部屋から出ていった。

花街の悪夢 3 (後書き)

み、短くてすみませんm(――)m

花街の悪夢 3・5

「ところで…、ご隠居。勇者殿に女装はまあいいとして、娼婦のような真似事をさせて捕らえて闇市場に競売に賭けるとは、勇者殿に後で何とご説明したらよいのか……」

「ふおおっほっほっほお、一度いいから、『悪役』をやって見たかったのじゃあ。なかなかの気色悪さをであろうっ?」

「そんなことよりアタシのあの格好はないんじゃない?」
「エタリーナ先代国王陛下?」

「ええじゃあないか、キール。昨夜はよう似合っておったぞ?」

「ヤダワア、モオウ。ご隠居ってば、上手なんだから」

キールがウインクする。

「しかしのおう、あの者が男なのが残念じゃのう。確かなあの者には妹がいるそうじゃなあ。
妹達はどうか？」

……。

沈黙する二人。

「ソウネエ、聖女様の方は綺麗な方ヨ…外見は」

「ええ、キールの言う通りです」

「何か性格に問題でもあるのかい？」

「いえ、性格は特に普段はお優しく、穏やかなご気性です」

ルイズラムは差し障りのない回答をする。

（（性癖に問題がありますが））

静華に対する男二人の言えない心の声。

いひ。

と笑いながら今頃、原稿をちゃっかり書いているのかも知れない。

「それから、一番下のシズクはねえ。とおおおおっても幼いけど可愛くて強いのよ」

「キール、シズク殿はああ見えてもう10歳だか…」

「ええ!？」

キールは驚いたようだ。

「して、その下の者は？」

「そうですね…。勇者殿の言葉を借りると天然でしっかり者だそうですね」

「天然でしっかり？不思議ちゃんだのう」

「そうですね…。わたしもそう思います」

雫は魔女っ子なので幾分当たっている。

「しかし、お嬢ちゃん、いや勇者君はヘタレじゃあなのう」

…ご隠居、それは言わなくても読者の皆様は重々承知です。

＊＊

「はあ、はつくしよん！」

同じ、建物の中でこんな会話などされているとは夢にも思わない勇者の静也は今夜の闇市場の競売に頭を抱え込んでいた…。

(…可哀想だな)
作者の心の声。

花街の悪夢 3・5（後書き）

最初からすべて仕組まれていたことでした。
作者にまで同情されて……

大丈夫！

きつと、活躍はある。

「あーれーとか、お代官様とかのセリフ無しで」

ぎく！

花街の悪夢 4（前書き）

本日、累計数PV 20・000 アクセスを越えました。

いつもお付き合いですり、誠にありがとうございます。

前半は静也視点

後半は宰相視点になります。

花街の悪夢 4

その日の晩、俺は初老の男に目隠しされ、馬車に乗って移動していた。

じいさんといってもいい年の男は俺に対して丁寧な扱い方をしていた。

不安もあつたがルイズラム宰相やキール副団長がなにかしら準備をしているに違いない。

そして、とうとう辿り着いてしまった闇市場へと……。

どこかは知らないが花街の中心地フラワータウンから少し離れた場所に闇市場があった。

俺は目隠しを外されて階段を降りるようじいさんに促されたて歩いた。

暗く狭い階段をゆっくり降りる。

冷たい石の階段を一步一步と降りていくと地下競売会場がそこにあ

った。

競売にきた人々は誰だか判らないように仮面をかけていた。

まるで仮面舞踏会のようだった。周りは皆、身なりの良い服をしている。

きっと、この国の腐った貴族や金持ち達に、あるいは他の国から来た者もいるだろう。

俺は手錠で繋がれて不安はあるものの意外と落ちついていてた。これから競売に賭けられる。

しかし、今夜は何か騒動が起こり失敗するだろうと俺は思った。

＊＊

俺はじいさんと離れて別々となった。

これから競売に賭けられるために、俺は控え室に連れられていた。

控え室はどんよりとした重い空気が流れてこれから売られるである

う少女達や男達までいる…。

…俺、別に女装しなくても良かったのでは？

と、今更ながらに思った。

その中でも一際目を引く若い青年がいた。

自分より一つか二つ年上に見える青年は銀色の髪に黄金の瞳をした美しい青年だった。

青年は薄汚れた白いシャツに黒いズボンを着ていた。

肌は白く体格も男としては小柄な方だろうか。俺より細く頼りなさそうに見える。

青年は誰にも目を向けず魂がない人形のようにも見えた。

何となく気になって声をかけてみた。

「くんばんは」

「……」

無言である。

「あなたは、どこから連れてこられたんだ？」

「×××××××」

「……すみませんでした」

どうやら、外国から連れ出されたのであろう。言葉が通じない。

短い間に密売の商品とされる俺達は番号が書かれた板を首に架けられて大きな鳥籠に一人一人閉じ込められていった。

これから始まるのは人身売買だ。

この国では禁じられている違法行為。

＊＊

今夜、行われる人身売買の参加者はこの国の先代国王陛下と私とキールを除いて27名。

月に一度のペースで開いているらしい。

この国では数年程前から頻繁に人が拐われたり、誘拐されたりしていたらしい。

それはエタリーナ国内だけの問題だけでなく、アディストリア公国にも被害がでていた。

『魔族の仕業』として魔族の討伐や殲滅を数年やってきたらしいが魔族達の数は減っているのに人拐いは減らず、被害は益々増える一方だった。

これに以前から疑問をもっていたエタリーナ国の先代国王陛下は自ら調べて密売をしている人間達が『魔族達の仕業』と言いふらし、更に美しい人形の魔族を捕まえて無理矢理、春を売らせていることも先代国王陛下は調べていた。

今では複数ある密売組織の中でも今回の獲物は大きな組織だ。ご隠居の護衛の兵が百五十人建物の外回りに配置させている。

今夜、会場が大騒ぎになるのは間違いない。

花街の悪夢 4 (後書き)

控室に魔族が捕まっていました。

静也はまだ気付いていない。

花街の悪夢 5

「さて、次の商品は黒髪黒目の何とも珍しい人間の娘です！」

おお！！

会場では、静也の番になり異様な盛り上がりを見せていた。

俺は珍獣ではありません。

と、静也はそう言いたくなる視線を周りから見られていた。

「それでは、100アツハーンからです」

静也の競売が始まった。

ちなみにエタリーナ国の通貨100アツハーンは日本円にして千円である。

野さんである。

福島県出身のとある病気の病原体を発見し、自らも、とある病気にかかり亡くなった医学者にして細菌学者の千円のお札に出ている人

物である。

「１ヤツホー」

お、１ヤツホーとは凄い１０００アッハーンで１ヤツホーつまり日本円でいちまんえん壹萬円の価値が静也についた。

「１００ヤツホー」

おお！

会場がざわめいた。

１００ヤツホーは１００万円だ。いきなり、高額な金額である。この国では一年間は遊んで暮らせる。

その人物は真つ赤に燃える髪に仮面を掛けた青年だった。

そう、アディストリア公国の細菌学者にして宰相のルイズラム・ジ・ヤイアンであった。

いきなりの高い金額を出されそれ以上の値段を言い出せる者はなかなか出ずに静也は無事に落札され、仲間の元に戻って鳥籠から解放された。

ルイズラムとキールの手によって静也は手錠を外してもらった。

＊＊

「次は銀色の髪に黄金の瞳の美青年です」

絶世の美人である。

青年は魂のない人形のような無表情であった。

静也が先程、声をかけた青年だ。

静也は今、手錠を外してもらい手を白い布で巻いていた。

「シズヤ殿、これからエタリーナ国の兵士がこの競売の関係者たちを捕らえますのでご協力お願いします」

「ええっ？」

静也は驚いたが、何とく最初から仕組まれたのではないか思っていたが…、

「黒幕はあのじいさんですか？」

静也は確信をもって言った。

「……」

ルイズラムは無言の沈黙で静也の言葉を肯定していた。

おゝい、ご隠居やゝい。

なんじゃゝい。

じいさん、黒幕になってますよ！

むむ…。このままではいかな。わしの『かつこちヨイわいるど』
ご隠居の活躍をみてくれ読者殿よ。

*
*

鳥籠に入れられた青年は今まで表情がなかったのにある人物を見ていた。

黒髪に紫色の瞳の長身の27、8歳位に見える男だ。

黒のタキシードに身を包み白い仮面をかけていた。：薔薇でも背負っていたら少女マンガのセーラー　ーンの某キャラに酷似している。

某キャラも前世からの云々設定があつたな。

7
 X
 X
 X
 X
 7

7
 x
 x
 x
 x
 x
 x
 x
 7

二人は知り合いのようだ。

静也は呆然と見ていたが、旅の共のルイズラムとキールは緊張しているようだ。

そこへ、鳥籠のある前へ一人の初老の男がひょっこり歩いてきた。

「ふうお、ほおっ、ほおっ、ほおっ。久しぶりじゃな、エタリーナ国の民達よ。わしが誰じゃか、わかるかのおう」

突然の初老の男の登場に地下会場にいた誰もが驚き恐れた。

数年前に退位したとはいえ、あのじいさんはエタリーナ国の民なら誰しも知っている。

この国の元国王陛下であつたお方だつた。

「この国では、人身売買は禁じられておるはずじゃのう」

元国王陛下が語る言葉に辺りの人間は冷や汗をかく。

「さて、この場に来ている者達よ！

我がマリオ・エタリーナの名において、
人身売買の密売及び誘拐の罪の容疑において

この場にいる者すべて捕縛する！」

マリオ元エタリーナの先代国王陛下はそう言い、その場にいた者達は逃げだそうと辺りは混乱した。

＊＊

逃げ戸惑う人々で地下競売会場は騒然となった。

静也はルイズラムがご協力お願いしますと意味がやっと解り帯に差し込んで隠していた武器を持ち出した。

末っ子がくれた手貫尾てぬきおに手を通して十手の柄をしっかりと握りしめて、静也は逃げようとする密売組織の関係者を捕まえようとした。

バシッ！

「……うつ」

静也は男を一人倒した。

そして、剣をあのじいさんに向かってくるものがいた。

すると、じいさんはもっていた杖で相手の剣をかわし、剣を弾き飛ばして相手の男の喉仏に杖をついていた。

さすがである。あの時のニタリと笑う気色悪いじいさんではない。

『かつこちヨイわいるど』なじいさんになった瞬間だった。

外からもエタリーナの兵士が増援にきて、会場内は速やかに静けさを取り戻した。

だが、今夜の27人の競売参加者の内、23人が捕縛され、4人を取り逃がしてしまった。

あの時、タキシードをきた男と連れ合いが捕まらなかった。

しかし、今夜のマリオ先代国王陛下のおかげで人間のよる密売組織を一つ捕まえる事が出来たのである。
エタリーナは一步、平和の礎を築き、『魔族達の仕業』で人が誘拐されていなかったという真実を突き止め、静也達は力になり、この国のために貢献したのであった。

＊＊

「ねえ、××××！元王様がくるなんて話聴いてないよ」

「すまない、アグネス。俺の失態だった。もう少しで弟を取り戻せたのに…」

「魔族達の兄貴せいやありまへん」

「そうだな、しかし、お前の弟は無事だろう？」

「ああ、あの元王様ならアダムをつやむやにあつかったりはしないと思うが…」

「今回は仕方ないわ。カイル！一度アジトに戻って様子をみましょう

う」

「アグネスの言う通り。一度、海へ戻ろう」

「魔族達の兄貴、気になさんさ。アグネスの姉御とカイル船長がに
ついてもう少し様子をみまひようや」

「ありがとう。リュミオン」

今はエタリーナフラワータウンの花街の郊外を離れた場所にある宿で地下競売会場
から逃げ延びた4人？の会話だった。

花街の悪夢 5（後書き）

ついに、作者の某主人公が出てきました。

こちらの本家では初の登場になります。

ちなみに花街編はまだまだ続きます。

花街の悪夢 6

「困りましたね、この方だけは身元も判らずに言葉も通じないとなれば……！」

ルイズラムははっと思い付いた。

「魔族？」

キールがルイズラムの言葉を紡ぐ。

「そういえばその人、水以外口にしてないよ。大丈夫かな？」

（ああ、そういわれれば）

静也の素朴な疑問に二人は気付いた。

昨日の騒動から一夜明けた今日、誘拐されて捕まっていた少女や男達を保護し、それぞれ搜索願いが出ていた人がほとんどであったがこの美しい青年だけ別であった。

言葉が通じない。

更に食事も水しか飲まず、どうしたらよいのか困ってしまう。

彼は常に無意識で魂がない人形のようなのだ。

しかし、話をかけると言葉を返してくれる。魔族語で。

彼は人間の言葉を理解しているが、喋れずに魔族語で話しているようだった。

「アタシの名前はキールよ。キ、イ、ル」

「…きいる？」

「そうそう！すごいじゃない。こっちの赤毛はズラよ、ズ」

「おい！待ちたまえ、ヅラじゃない、地毛だ！じ、げ」

「キールさんもルイズラムさんも何か話がズレてきてますよ。」

「地毛だからズレたりしたりは」

「ルイよ。ル、イ」

「…るい」

「「始めからちゃんと教えろ！」」

キールに突っ込む二人だった。

「最後にシズヤよ。シ、ズ、ヤ」

「シズヤ」

彼は三人の名前だと理解し、もう一度三人の名前を順に呼び、最後に自分自身に指を向けた。

「アダム」

彼は自分の名前を告げた。初めて会話が成立した気がした。

＊＊

「ところでアダム、君は、何を食べるんだい？」

ルイズラムはアダムに聞いているが、

「
×××××」

やっぱり魔族語である。

アダムは一体何を食するのか！？

すると、アダムはキールに近づいて、ちゅうつと音をたてて口を吸った！

まさに吸うと言うのが正しいだろう。

静也とルイズラムはぎょっとしてアダムから離れた場所に移動した。

アダムはアレなのか！

二人は身の危険を感じながらもキールはアダムからの口吸いが終わり、ガクツと膝をついた。

「残念だけど、アダムは淫魔^{いんま}が夢魔^{むま}つてどこかしら？」

キールはアダムの正体が判ったようだ。

「……」

静也とルイズラムはキールの言葉に少し安堵した。

キールは女性と間違えられたらしい…。

その証拠にアダムは初めて表情を崩して眉間^{みけん}に皺^{しわ}を寄せて蒸せ返していた。

先程の光景をあの色物好きの長女と巫女姫が見ていたとしたら…、

いひひ、と笑いながら鼻血を放つ鈴木家の長女と、あらまあ、どうしましうと手で顔を覆いながらも、指のすき間からちゃっかりその光景を堪能しているアディストア王家の長女が、容易に想像出来てしまう……。

……………！？

静也は妹のことを思い出して薬袋の中に絶対に使わないと思っていた薬を思い出した！

静也はごそごそと薬を探して薬瓶に書かれた内容を見た。

『せいめいよくきょつりよく
性欲欲協力増幅液』

効用：性欲と生命力を高め増幅させる

備考：一滴で効果抜群

二滴で中毒者爆発

三滴で限界致死量注意

こ、これだ！

今、これが必要としている魔族がすぐ目の前にいるではないか。

静也はアダムに一滴だけ、その秘薬ひやくという名の媚薬びやくを飲ませた。

アダムはかつてないほどべろんべろんになって千鳥足ちどりになった。

…ヒック?!

一滴で効果は抜群に違いないようだ。

結局、アダムはそのまま次の日の昼までぐっすり眠っていた。起きた時は血行が良くなり頬に赤みが差していた。起き

花街の悪夢 6（後書き）

アダムは今まで緊張仕切っていて疲れきっていたので、一気に緊張が緩んだと思って下さい。

ちなみにどんな口吸いだったかは読者様のご想像にお任せします。

花街の悪夢 7 (前書き)

暴力的なシーンがありますのでご注意ください。

花街の悪夢 7

アダムに良く似た18、9歳位の女性がいた。

女性は薄暗い土壁の寒い部屋に閉じ込められ、冷たい鎖の首輪に繋がれていた。

女性は目を焼かれ瞼が火傷でただれていた。

その火傷は手当てされることもなく放置されていた。

女性は一人、暗闇でどうしようもない悲しみと孤独の中にいた。

そして、双子の弟のことを思い出していた。

魔族の保護が出来た。

しかし、アダムは魔王の子供なのかは判断出来ない。

それに最初の魔族が目撃された情報も残っていた。

エタリーナの兵士と共に競売に参加していた貴族や金持ちの商家の家を家宅捜索し今まで買われてきた人々の救出に静也達は協力し情報を探っていた。

今日は午前中から静也はアダムの傍についてキールとルイズラムは家宅捜査を手伝いにいていた。

アダムは昨日の薬で良く眠っていた。

時々、イブと名前を呼んでいた。

気になったが今はそっとしておく。

眠れる時に眠っていた方がいい……。

静也自身も捕まっていた時は、正直目が覚めてから怖くて不安でいっぱいだった。

アダムの今までの境遇に近い体験をした静也はアダムの精神的不安が少しでも取れば良いと思った。

＊＊

私が売られてきたのはどれくらい前だろうか？

一ヶ月は過ぎたかも知れない。

目を焼かれてから日の光さえも見れなくなったのは、一週間前だ。

瞼はただれて化膿し、病んでいた。

私は最初に屋敷の主人に襲われて体も心もズタズタにされ、主人が私のことが奥方にはれるや否や鞭で体を叩かれ、松明で顔を焼こうして私は光を見ることを奪われた。

「あんな何処の馬の骨とも知れない、化け者にあんた良く相手にできるわね。こんな悪夢、わたくしが冷まさせてあげる」

奥方が私の目を焼く瞬間に言った言葉だった。

そのあとは猛烈な痛みに高熱を出して倒れた私はそのまま放置された……。

私のこの地獄のような悪夢はいつ覚めるのだろうか……。

目が覚めたアダムは顔色が幾分よくなり表情もどことなく柔らかくなっていた気がした。

お昼に帰ってきたキールとルイズラムは未だ人身売買で捕まった人々の解放をして、午後もその任務に当たるらしい。

静也もアダムを連れて一緒に行くことにした。

時々、アダムがイブという女性の名を呟いていたことを二人に話しておいた。

「やはり、もう一人魔族がいるのでしょうか」

「イブちゃんね！早く見つかるといいわね」

「はい、見付けてあげたいです」

＊＊

それから、3件目の貴族の屋敷にきた。

アダムの様子が何だかおかしい。

キヨロキヨロ辺りを見回していた。

エタリーナの兵士を数十名連れてその屋敷の主人を訪ねた。

出てきた主人と奥方は明らかに何か隠していた。

「わし達の屋敷には一步もいれんぞ！」

大概是そう言うがあるものをルイズラムがある巻物を開いて見せると二人の顔色が真っ青になった。

その巻物とは国王陛下自らが書いた家宅搜索を許す内容とその旨を断った場合における処罰があると書かれていた。

静也達は家の中に入るとアダムが何かに導かれるようにある場所に歩いていった。

私は夢を見ていた。

もう、疲れ果て生きる力さえもうあまり残されていない。

夢の中には弟が私を見付けてくれた。

しかし、不思議と何かふわふわして暖かいものがこみあげてくる。

手の指先から温かくなり、トクントクンと穏やかな心臓の音が聞こえる。

その心臓の音に安心してしまった。

私の悪夢は終わったのだろうか？

＊＊

アダムはある薄暗い土壁の寒い部屋に冷たい鎖の首輪をされいた女性を見つけた。

瞼が火傷でただれていて酷い有り様だった。

そして、着ているものもぼろぼろで全身にむち打ちの後があった。

静也は急いでアダムにも飲ませた薬を一滴だけ女性に飲ませた。

アダムに良く似た女性のあまりにも酷い有り様にアダムは呆然としていたが、他の三人はその女性を早くこの場から離れた方が良くないと考えて迅速に引き上げる行動をした。

女性を宿のベッドに休ませて医者に見てもらい、火傷をはじめ治療してもらった。

一番の回復は一緒に寝ることだと医者はいっていた……。

アダムはやはり彼女のことをイブと呼んでいた。

やはり彼女がアダムの姉弟らしい。

イブは今夜、静也と一緒に寝ることになったが理由はキールは既婚者で万が一にも間違いを起こさないために却下された。

キールは昨日、アダムに生気を取られ、残るは静也となりイブと添い寝をしなくてはならなくなった。

これは夢だ。

静也は不思議と夢の中にいるのかわかった。

辺りは山々が広がり富士山が見えた。

空は青く澄み渡り、遠くで海まで見渡せた。

近くには花街フラワータウンでみたエキザカムの青紫の可愛らしい花が咲いていた。

ああ、彼女がいた。

この景色と一緒に見ているんだと思うとまた不思議な思いがした。

鷹が空を飛んでいた。

彼女と何も話さず、ぼーと一緒にこの景色を見ていた。

＊＊

朝、起きると彼女の火傷の後が綺麗になくなっていた。

静也はエキザカムの花を摘んで彼女の部屋に飾った。

イブは眠りから覚めた。

太陽の光が見え、近くには弟のアダムがいた。

これはまた夢なのだろうか？

《イブリティーナ、久しぶりだね》

アダムは魔族語でイブに言った。

《ええ、アダム、ここは？》

イブの問いにアダムは全部話した。

そこへ、キールが部屋に入ってきた。

「あら、イブちゃん。目が覚めたのね。あら、素敵な花ね」

キールの問いにアダムとイブは部屋に飾られた花の存在に気付いた。

「その花は、エキザカムっていつてね。花言葉は『あなたの夢は美しい』っていうのよ」

キールの話にアダムとイブは花を見つめてほっと安心した。

もう、悪夢は終わり。

夜明けがきたのだ。

二人はそんな思いを青紫の花弁と真ん中が黄色の花が私達の希望ように思えた。

花街の悪夢 7 (後書き)

これで、やっと花街編も終わりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0994x/>

鈴木三兄妹、異世界へ行くっ！！

2011年11月30日21時18分発行